

# 久米才歩行遺跡 6次調査 南久米斎院遺跡 1次・2次調査

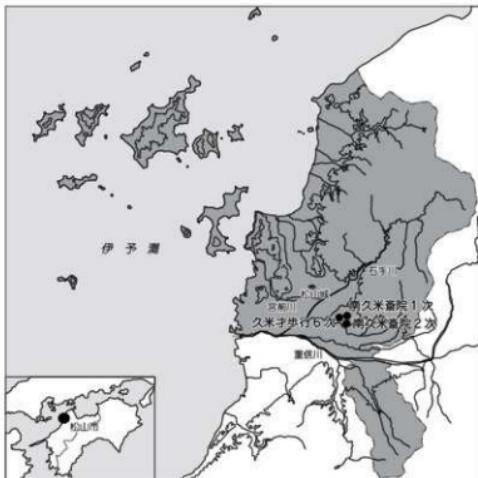
国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2013

松山市教育委員会  
公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋蔵文化財センター

く め さ い か ち い せ き  
久 米 才 步 行 遺 跡 6 次 調 査  
みなみ く め さ や い せ き  
南久米斎院遺跡 1次・2次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書



2013

松 山 市 教 育 委 員 会  
公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋 藏 文 化 財 セン タ ー

## 序　　言

本書は、平成元年度・6年度・11年度に国庫補助事業の一環として実施した来住・久米地区における個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書です。この地区は、古代の寺院や役所等の遺跡群である国指定史跡「久米官衙遺跡群　久米官衙遺跡　来住廃寺跡」が所在することで知られ、全国的にも重要視されている地域です。

今回、報告いたします3遺跡は、この史跡の北東に隣接していることから、史跡との関連を考慮した上で調査を実施いたしました。その結果、久米才歩行遺跡6次調査では古墳時代の竪穴建物や掘立柱建物のほか、古代の掘立柱建物や中世の土坑墓を発見しました。また、南久米斎院遺跡1次調査では弥生時代の柱穴、同2次調査では弥生時代の竪穴建物や古墳時代の掘立柱建物、中・近世の土坑墓等を確認し、久米官衙遺跡群北東域の古代前後の変遷を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

このような成果を上げることができたのは、関係者の方々の埋蔵文化財行政に対する深いご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げますとともに、今後も変わらぬご高配を賜りますようお願い申し上げます。

本書が、文化財保護、生涯教育及び埋蔵文化財調査研究の一助となり、末永くご活用いただければ幸いに存じます。

平成25年3月

松山市教育長  
山本　昭弘

## 例　　言

1. 本書は、松山市教育委員会と松山市立埋蔵文化財センター、財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センターが、国庫補助事業として平成元年・6年・11年度に松山市南久米町内で実施した宅地造成工事と木造住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本報告書の遺構は、呼称名を略号化して記述した。  
S B : 竪穴建物、掘立 : 掘立柱建物、S D : 溝、S K : 土坑、S P : 柱穴、倒木址 : 倒木
3. 本書で使用した標高数値はすべて海拔標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。
4. 基本層位や遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1988)に準拠した。
5. 遺構の製図および遺物の実測・製図は、水本完児と相原浩二の指示のもと、池内芳美、越智田美紀、木西嘉子、佐伯利枝、中村　紫、西本三枝、平岡直美、村上真由美、山下満佐子が行った。
6. 遺物の復元は、石川千代美、和泉順子、寺尾いづみ、松本美代子が行った。
7. 遺構図・遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。
8. 写真図版は遺構撮影を水本、相原、大西朋子が行い、遺物撮影および図版作成は大西が行った。
9. 本書の執筆は水本と相原が担当し、編集は水本を中心に佐伯、平岡、村上の協力を得た。浄書は中村が担当した。なお、掲載図面はデータ入稿であるが、写真図版はスキャナ分解による。
10. 本書にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管・収蔵している。
11. 報告書抄録は、巻末に掲載している。

## 目 次

第1章 はじめに .....	〔水 本〕 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....		1
第2節 組 織 .....		
第3節 立地と環境 .....		2
第2章 久米才歩行遺跡6次調査 .....	〔水 本〕 .....	7
第1節 調査の経緯 .....		7
第2節 層 位 .....		10
第3節 遺構と遺物 .....		
第4節 小 結 .....		19
第3章 南久米斎院遺跡1次調査 .....	〔水 本〕 .....	25
第1節 調査の経緯 .....		25
第2節 層 位 .....		26
第3節 遺構と遺物 .....		32
第4節 小 結 .....		38
第4章 南久米斎院遺跡2次調査 .....	〔相 原〕 .....	41
第1節 調査の経緯 .....		41
第2節 層 位 .....		44
第3節 遺構と遺物 .....		45
第4節 小 結 .....		52
第5章 調査の成果と課題 .....	〔水 本〕 .....	59

## 挿図目次

### 第1章 はじめに

第1図 周辺遺跡分布図 ..... 5

### 第2章 久米才歩行遺跡6次調査

第2図 調査地位置図.....	8	第8図 挖立2測量図・出土遺物実測図.....	16
第3図 遺構配置図.....	9	第9図 挖立3測量図・出土遺物実測図.....	17
第4図 北壁・東壁土層図.....	11	第10図 SK1・2測量図・出土遺物実測図 ..	18
第5図 SB1測量図.....	12	第11図 第II・III層出土遺物実測図.....	20
第6図 SB1出土遺物実測図.....	13	第12図 地点不明出土遺物実測図	
第7図 挖立1測量図・出土遺物実測図.....	15		

### 第3章 南久米斎院遺跡1次調査

第13図 調査地位置図.....	27	第18図 柱穴測量図.....	33
第14図 北壁土層図.....	28	第19図 第III②層出土遺物実測図.....	35
第15図 東壁・西壁土層図.....	29	第20図 第III①層・Ⅲ②層出土遺物実測図 ..	36
第16図 南壁土層図.....	30	第21図 地点不明出土遺物実測図.....	37
第17図 遺構配置図.....	31		

### 第4章 南久米斎院遺跡2次調査

第22図 調査地位置図.....	41	第29図 SB2測量図.....	48
第23図 調査区位置図.....	42	第30図 挖立1測量図・出土遺物実測図 ..	49
第24図 遺構配置図.....	43	第31図 挖立2測量図.....	50
第25図 北壁土層図.....	44	第32図 SK7・10測量図・出土遺物実測図 ..	51
第26図 SB1測量図.....	45	第33図 SP105出土遺物実測図.....	52
第27図 SB1炉跡(SK5)測量図 .....	46	第34図 その他の出土遺物実測図	
第28図 SB1炉跡(SK5)出土遺物実測図			

## 表 目 次

### 第1章 はじめに

表1 調査地一覧..... 1

### 第2章 久米才歩行遺跡6次調査

表2 壓穴建物一覧 .....

22 表3 挖立柱建物一覧 .....

表 4 土坑一覧	22	表 10 挖立 2 出土遺物觀察表（石製品）	23
表 5 SB1 出土遺物觀察表（土製品）		表 11 挖立 3 出土遺物觀察表（土製品）	
表 6 SB1 出土遺物觀察表（石製品）	23	表 12 SK1 出土遺物觀察表（土製品）	24
表 7 挖立 1 出土遺物觀察表（土製品）		表 13 第Ⅱ層・Ⅲ層出土遺物觀察表（土製品）	
表 8 挖立 1 出土遺物觀察表（石製品）		表 14 第Ⅲ層出土遺物觀察表（石製品）	
表 9 挖立 2 出土遺物觀察表（土製品）		表 15 地点不明出土遺物觀察表（土製品）	

### 第3章 南久米斎院遺跡1次調査

表 16 柱穴一覧	38	表 19 地点不明出土遺物觀察表（土製品）	40
表 17 第Ⅲ②層出土遺物觀察表（土製品）	39	表 20 地点不明出土遺物觀察表（石製品）	
表 18 第Ⅲ①層出土遺物觀察表（土製品）	40		

### 第4章 南久米斎院遺跡2次調査

表 21 壓穴建物一覧	53	表 28 SK5 出土遺物觀察表（装身具）	57
表 22 土坑一覧		表 29 挖立 1 出土遺物觀察表（土製品）	
表 23 倒木址一覧		表 30 SK7 出土遺物觀察表（土製品）	
表 24 溝一覧	54	表 31 SK10 出土遺物觀察表（土製品）	58
表 25 挖立柱建物一覧		表 32 SP105 出土遺物觀察表（土製品）	
表 26 柱穴一覧		表 33 その他の出土遺物觀察表（土製品）	
表 27 SK5 出土遺物觀察表（土製品）	57		

## 写真図版目次

### 第2章 久米才歩行遺跡6次調査

図版 1	1. 調査前全景（北東より） 2. 作業風景（南西より）	
図版 2	1. 遺構検出状況（東より） 2. 遺構完掘状況（東より）	
図版 3	1. SB1 検出状況（北東より） 2. SB1 完掘状況（北東より）	
図版 4	1. SK1 遺物出土状況（東より） 2. 挖立 3〔SP31〕遺物出土状況（北より）	
図版 5	1. SB1 出土遺物	
図版 6	1. 出土遺物〔挖立 1: 17 ~ 21・23、挖立 3: 31・32、SK1: 35、第Ⅱ層: 39・40、 第Ⅲ層: 43・44、地点不明: 45・48〕	

### 第3章 南久米斎院遺跡1次調査

- 図版 7 1. 調査前全景（南東より）  
2. 作業風景（南西より）
- 図版 8 1. 遺構検出状況（北より）  
2. 遺構完掘状況（東より）
- 図版 9 1. 包含層遺物出土状況（1）（北より）  
2. 包含層遺物出土状況（2）（東より）
- 図版 10 1. 出土遺物〔第III②層：1・3・4・7・11・13・25～27、第III①層：28・33、  
地点不明：40・43〕

### 第4章 南久米斎院遺跡2次調査

- 図版 11 1. 調査区と周辺の状況（東より）  
2. 遺構検出状況（東より）
- 図版 12 1. 北壁土層（南より）  
2. 作業状況（東より）
- 図版 13 1. SB1南北ベルト土層堆積状況（西より）  
2. SB1内SK5遺物出土状況（東より）
- 図版 14 1. SB1・2完掘状況（東より）  
2. 掘立1柱穴完掘状況（南東より）
- 図版 15 1. 掘立2完掘状況（東より）  
2. 調査区完掘状況（東より）
- 図版 16 1. SK5出土遺物（1～9）  
2. SK7出土遺物（13～15）  
3. SP105出土遺物（17・18）・その他の出土遺物（19～21）

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

今回報告する久米才歩行遺跡6次調査と南久米斎院遺跡1次・2次調査は、国庫補助事業として実施した個人住宅建築等に伴う埋蔵文化財の発掘調査である。調査は文化財保護法第57条の2(現93条)の届出を受け、愛媛県教育委員会の指示に基づき行った。なお、調査地は松山市が指定する周知の埋蔵文化財包蔵地『No.126 南久米町遺跡(旧高畠遺物包含地)』及び、『No.127 久米官衙遺跡群(旧来住庵寺跡)』内に所在する。

このうち、久米才歩行遺跡は昭和63年度からこれまでに7度の発掘調査が実施されている。2次調査では弥生時代前期末から中期初頭の堅穴住居が検出され、松山平野でも稀少例となっており、古墳時代後期の堅穴住居も検出されている。また、5次調査から出土したタマキガイ系の貝殻施文の弥生土器は、下関地域との関係が知られる資料であり、このほか、同調査では古墳時代中期の堅穴住居が検出されている。

久米才歩行遺跡6次調査及び南久米斎院遺跡1次調査は松山市教育委員会が実施し、南久米斎院遺跡2次調査は財団法人松山市生涯学習振興財団の協力のもと、松山市教育委員会が実施した。

これらの調査における基礎的な整理作業は各調査年度に実施したが、本格的な整理作業については平成23年度に行い、報告書作成作業については平成24年度に行った。

表1 調査地一覧

調査名	調査場所	調査期間	面積(m <sup>2</sup> )	担当
久米才歩行遺跡6次調査	松山市南久米町487番2	1999(平成11)年9月20日～ 2000(平成12)年1月31日	286.82	重松佳久 小笠原彰
南久米斎院遺跡1次調査	松山市南久米町633番2、 635番4	1990(平成2)年1月13日～ 同年3月15日	318.25	西尾幸則 水本完児
南久米斎院遺跡2次調査	松山市南久米町631番1	1994(平成6)年6月20日～ 同年7月22日	600.00	田城武志 相原清二

## 第2節 組織

出土物整理作業及び本書の編集作業は、国庫補助を受けて財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に委託して埋蔵文化財センターにて実施した。なお、財団法人松山市文化・スポーツ振興財団は、平成24年4月1日より公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団に名称変更をしている。

平成 23 年度出土物整理組織（平成 23 年 4 月 1 日時点）

松山市教育委員会

教育長 山内 泰	理事長 一色 哲昭
事務局局長 鳥 啓吾	事務局局長 松澤 史夫
企画官 渡部 満重	次長 近藤 正
企画官 青木 茂	施設利用推進部 部長 中越 敏彰
文化財課課長 駒澤 正憲	埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
主幹 森 正経	主査 栗田 茂敏
主査 竹内 明男	主任 水本 完児(整理担当)
	主任 相原 浩二(整理担当)
	大西 朋子(写真担当)

平成 24 年度報告書編集・刊行組織（平成 25 年 1 月 1 日時点）

〔刊行組織〕

松山市教育委員会

教育長 山内 泰 (兼任、～10/1)	理事長 一色 哲昭
山本 昭弘 (10/2～)	事務局局長 松澤 史夫
事務局局長 鳥 啓吾	次長 近藤 正
企画官 渡部 満重	施設利用推進部 部長 玉井 弘幸
企画官 前田 昌一	埋蔵文化財センター 所長 田城 武志
文化財課課長 駒澤 正憲	主査 栗田 茂敏
主幹 篠原 昭二	主任 水本 完児(編集担当)
	主任 相原 浩二(整理担当)
	大西 朋子(写真担当)

### 第3節 立地と環境

#### 1. 立 地

来住庵寺を含む久米官衙遺跡群は、松山平野の北東部に展開している。地質学的には、高純山塊に源を発した小河川によって形成された洪積世の段丘・旧期扇状地堆積物上にあたる。東西 3km、南北 1.0～1.5km ほどの区域のうち、北を流れる堀越川と南の小野川によって挟まれた部分は川の浸食による段丘地形を辺縁とする微高地状の地形を呈している。遺跡群の中心域は北を流れる堀越川の段丘を背に、南側を蛇行して西に流れる小野川周辺の低地部を正面とする区域に立地している。この微高地南側区域では、これまで特に顯著な遺構は検出されておらず、官衙遺跡群の実質的な範囲は微高地の南辺と北の堀越川によって規定されていると考えられている。また、7世紀になると松山平野における政治的中心は、小野川をさらに通った別の支流である堀越川の南に移動し、久米官衙遺跡群の中心域を形成するに至る。

久米才歩行遺跡6次調査地は堀越川の北側地域にあり、久米高畠遺跡とは堀越川を挟んだ位置にある。また、南久米斎院遺跡1・2次調査地は堀越川の南側地域にあり、来住台地上に位置する。

## 2. 環 境

ここでは、調査地が所在する来住・久米地区の遺跡分布を中心に述べることにする（第1図）。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺物は、この地区に限らず松山平野内では該期の遺構とともに出土した事例は知られておらず、数例ある資料も採集遺物であったり、すべて単独での出土例である。来住・久米地区では、鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土したサスカイト製の角錐状形石器、久米窪田V遺跡出土の角錐状形石器のほか、平井町山田池で採集されたナイフ形石器などの数例が知られているのみで、いずれも遺構に伴っていない。

### 縄文時代

確実な遺構とともに遺物が出土するのは、後期中頃以降である。数少ないこの時期の良好な一括遺物としては、久米窪田森元遺跡で検出された土坑出土の土器群がある。近隣の久米窪田I遺跡でも同時期の遺物が出土しており、これらの遺物は小型方形住居に伴うものとされている。晩期では、近年になり来住台地上での遺構・遺物の検出が注目される。久米高畠遺跡36次調査では、晩期前業の土器群を伴う円形堅穴住居1棟が検出されているほか、同エリア内の26次・35次調査でも同時期の土坑が検出されており、該期の資料が稀薄な松山平野にあっては貴重な事例といえる。晩期末の比較的良好な例としては南久米片廻り遺跡2次調査の土器群があり、朱塗りの壺と刻目凸帯を有する深鉢が出土している。これは、斜面堆積で明確な遺構に伴うものではないが、検出状況等にまとまりがみられ、一括性の高い遺物群である。

### 弥生時代

縄文時代には点在した遺跡の分布も、弥生時代になると面的な広がりを持ち、その数も大幅に増大する。その中でも最も注目されるのが、来住台地上に展開する前期末から中期初頭の集落である。このエリアにおける弥生時代の遺跡は前期末から後期まで継続しているが、その盛期は前述の前期末から中期初頭の段階にある。集落は少数の円形堅穴住居と数多くの無柱長方形堅穴と土坑などによって構成されているが、近年の調査（久米高畠23・25・28・29次調査）や過去の来住V遺跡と来住庵寺20次調査などの調査成果をあわせると、同時期併存の環濠を複数伴う可能性が高くなってきている。中期の良好な資料は現在のところ少ないが、中期後半あるいは後期初頭、凹線文段階の遺物が出土する遺跡はいくつかある。来住庵寺15次調査では、台地縁辺部の落ち際に投棄された状況で多数の凹線文段階の遺物が出土している。この中には完形に復元できる土器が多数含まれており、良好な一括資料とされている。ただし、台地上では該期の遺構は稀薄であり、集落展開について未だ不明な部分が多い。後期の集落は、面としての広がりは把握されていないのが現状であるが、単発的に遺構が検出される例はいくつかある。南久米片廻り遺跡検出の円形堅穴住居からは、終末期の土器とともに鉄鎌が1点出土している。また、久米高畠遺跡10次・27次・58次調査地では遺構が確認されており、久米官衛遺跡群から遺跡群周辺の微高地には弥生時代を通して生活が営まれたことがわかる。

## 古墳時代

前期の古墳は確認されていないものの、中期から後期の大型古墳が多数所在している。鷹子町に所在する素鷦神社古墳は、直径約30mを測る松山平野でも最大規模の円墳とされている。平地部に眼を転ずると、高井町の波賀部神社古墳、北久米町の二ツ塚古墳（北久米遺跡）のほか現在では消滅してしまったが鷹子町タンチ山（双子塚）古墳など、松山平野では数少ない後期の前方後円墳が数多く分布する地域である。これらの大型古墳は、久米官衙遺跡群をはじめとする拠点的な集落を担った首長層の墳墓として注目される。古墳時代には久米地城に久米部が設置され、久米国造が置かれるなど、畿内王権と密接な関係を持っていたと推測される。

集落では来住町遺跡8次調査、久米高畠遺跡10次・26次・35次・60次・64次調査において古墳時代中期から後期の堅穴住居や掘立柱建物、土坑、溝が検出されているほか、久米高畠遺跡64次調査で、一辺7.0mを超える後期の大型堅穴住居1棟を検出した。これらのことから、7世紀代になり来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となった地方豪族の存在が挙げられよう。

## 古代

国指定史跡として知られる来住廃寺をはじめとして、官衙関連遺構を多数検出している久米高畠遺跡がある。久米高畠遺跡は調査事例が70次を超え、寺院・官衙施設の構造も次第に解明されつつある。久米官衙遺跡群の調査は、白鳳寺院址とされる来住廃寺の調査が契機となって始められ、その後の調査の進展とともに、寺院隣接部分にある方一町規模の「回廊状遺構」をはじめ、台地上に方一町規模の区割りが存在することが明らかとなった。台地北部にある半町規模の方形区画城内部における近年の調査では、政庁としての姿を整えた建物配置が確認されている。以前より推定されていたことではあるが、久米高畠遺跡7次調査において「久米評」線刻須恵器が出土していることから、この区画域が評衛政府であることがより確定的なものとなった。そればかりでなく、その成立が評制以前の7世紀前半の段階である可能性が高くなつたことも注目される成果である。また、その南西部では8世紀以降の段階で成立した濠で囲われた正倉院の発見等もあり、平野内ではきわめて重要な遺跡群である。

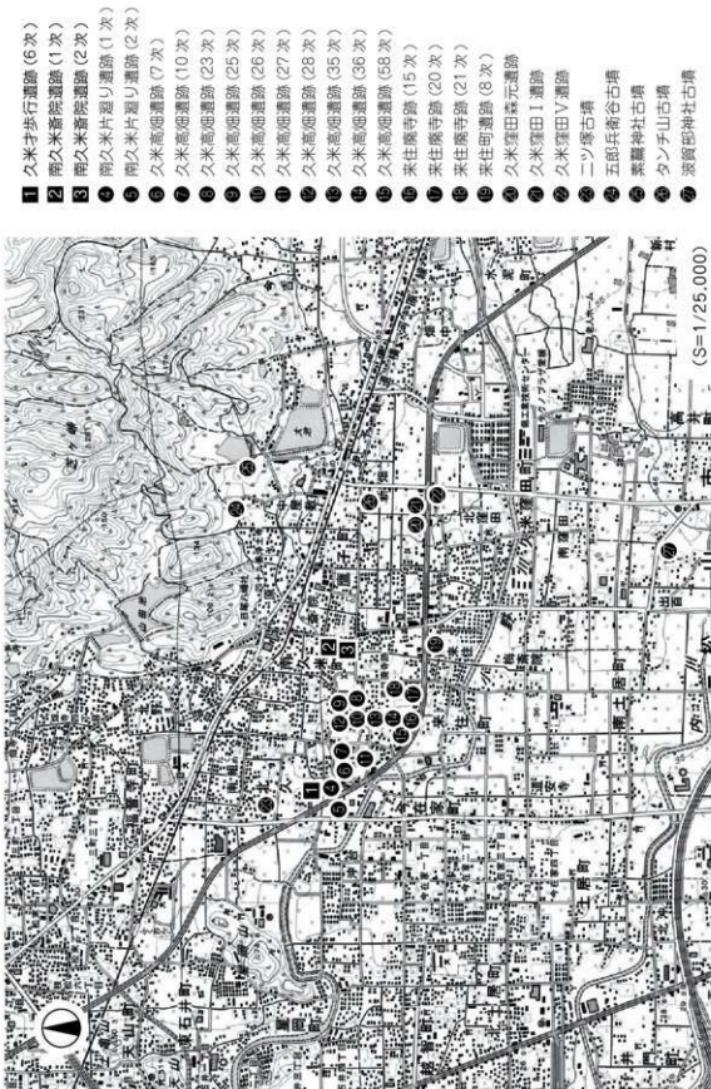
## 中世

鎌倉時代以降、久米官衙遺跡群の所在する微高地上では、密度は低いものの中世の遺構が発見されている。来住廃寺金堂基壇から北東に90m程離れた地点にある来住廃寺21次調査（平成5年度調査）や来住廃寺37次調査（平成22年度調査）では、複数の掘立柱建物が重複して建てられていることが判明したほか、来住廃寺金堂基壇の南東に隣接する地点で実施した来住廃寺24次調査（平成7年度調査）からは、中世後期から末期頃の屋敷跡の一部が確認されている。

## 近世

遺跡群南部にある国道11号線北側の隣接地では、近世墓がまとまって確認されている。来住廃寺15次調査において確認された土坑墓には、17世紀前半の肥前系陶器が副葬されていた。また、金堂基壇以南にも近世の遺構が発見されている。来住廃寺金堂基壇北東隣接地には平成11年度まで長隆寺という寺院が営まれていた。長隆寺は江戸時代前期の天和3(1683)年に開山したと伝えられており、来住廃寺の發掘調査に伴って土壌跡や本堂基壇跡などが検出されている。なお、来住廃寺金堂基壇から長隆寺旧境内地においては、黄橙色粘土による造成土層が広く堆積しており、粘土層の下層には江戸時代末期の遺物を数多く包含する灰褐色土が堆積している。これらの堆積状況から、来住廃寺金堂基壇の周囲において幕末期から明治時代初期に大規模な土地の変更が行われたことがわかる。

立地と環境



第1図 周辺遺跡分布図

## 【参考文献】

- 森 光晴 1978 「五郎兵衛谷古墳」松山市文化財調査報告書 第13集
- 阪本 安光 1981 「久米庭田V遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」第6集  
小林 一郎 「平井町山田池」「考古編Ⅱ」松山市資料集 第2巻
- 栗田 茂敏 2012 「久米庭田森元遺跡」「南久米片廻り遺跡・久米庭田森元遺跡」松山市文化財調査報告書 第157集
- 吉本 拝 1981 「久米庭田I遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第5集  
阪本 安光
- 橋本 雄一 1998 「久米高畠遺跡 36次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報X」  
小笠原善治
- 小玉亜紀子 2008 「久米高畠遺跡 - 26次調査 -」松山市文化財調査報告書 第127集
- 梅木 謙一 2004 「久米高畠遺跡 35次調査地」「来住・久米地区的遺跡V」松山市文化財調査報告書 第101集
- 河野 史知 1991 「南久米片廻り遺跡 2次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅲ」  
松村 淳
- 山本 健一 1995 「久米高畠遺跡 23次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ」  
橋本 雄一
- 相原 秀仁 2003 「久米高畠遺跡 - 25次調査 -」松山市文化財調査報告書 第93集
- 高尾 和長 1997 「久米高畠遺跡 28・29次調査地(久米官衙遺跡群)」「松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ」  
宮内 慎一
- 橋本 雄一 1981 「来住V遺跡」「一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」第5集  
小笠原善治
- 吉本 拝 1994 「来住庵寺 20次調査地」「来住・久米地区的遺跡II」松山市文化財調査報告書 第44集  
阪本 安光
- 水本 完児 1993 「来住庵寺遺跡 第15次調査」松山市文化財調査報告書 第34集  
梅木 謙一
- 西尾 幸則 2012 「南久米片廻り遺跡」「南久米片廻り遺跡・久米庭田森元遺跡」松山市文化財調査報告書 第157集  
山本 健一
- 栗田 茂敏 2004 「久米高畠遺跡 10次・27次調査地」「来住・久米地区的遺跡V」松山市文化財調査報告書 第101集  
宮内 慎一
- 相原 秀仁 2004 「久米高畠遺跡 58次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報 16」  
田城 武志
- 小笠原 彰 2003 「波賀部神社古墳」「松山の文化財」  
松山市教育委員会
- 松山市教育委員会 1982 「波賀部神社古墳」「古代の松山平野 先土器時代～平安時代」  
高尾 和長
- 山之内志郎 2007 「北久米遺跡 4次調査地(二ツ塚古墳)」「松山市埋蔵文化財調査年報 19」  
山之内志郎 2007 「北久米遺跡 6次調査地(二ツ塚古墳)」「松山市埋蔵文化財調査年報 19」  
重松 佳久 2010 「タンチ山(双子塚)古墳」「タンチ山(双子塚)古墳 国庫補助市内遺跡発掘調査報告書」  
松山市文化財調査報告書 第140集  
宮内 慎一 1999 「来住町遺跡 8次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報 11」  
相原 秀仁
- 田城 武志 2004 「久米高畠遺跡 60次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報 16」  
田内真由美
- 橋本 雄一 2005 「久米高畠遺跡 64次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報 17」  
山中 菊乃
- 橋本 雄一 2009 「久米高畠遺跡 7次調査」「久米高畠遺跡 1次・7次調査 政庁の発掘調査2」松山市文化財調査報告書 第136集  
水本 完児 1993 「来住庵寺 21次調査地」「松山市埋蔵文化財調査年報V」  
小笠原善治
- 相原 浩二 2010 「来住庵寺 37次調査」「松山市埋蔵文化財調査年報 22」  
山之内志郎

## 第2章 久米才歩行遺跡6次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第1・2図）

1998（平成10）年6月2日、花本昭人氏より松山市南久米町487番2地内における宅地造成工事に伴う埋蔵文化財の確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

申請地の周辺では、2012（平成24）年3月までに久米才歩行遺跡として7回の調査が行われている。申請地南西側には久米才歩行遺跡1次・3次・4次調査地、北西側には2次調査地、北東側には5次調査地、西側には7次調査地があり、弥生時代から近世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。

これらのことから、当該地における埋蔵文化財の有無と遺跡の範囲や性格を確認するため、1998（平成10）年6月12日、文化教育課は試掘調査を実施することとなった。調査の結果、遺構は土坑や柱穴を検出し、遺物は土師器片や陶磁器片を確認した。

この結果を受け、申請者と文化教育課の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地造成工事によって消失する遺跡に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、申請地内における古墳時代から中世までの集落構造解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、1999（平成11）年9月20日より開始した。

#### 2. 調査の経緯

発掘調査は、1999（平成11）年9月20日から2000（平成12）年1月31日までの間に実施した。以下、調査工程を略記する。

1999（平成11）年9月20日、調査地内に発掘道具一式を搬入する。9月21日、申請者の立会いのもとに調査区を設定し、調査を開始する。重機を使用して表土層を掘削し、この日に終了する。9月27日、第Ⅲ層上面で遺構検出作業をし、堅穴建物、掘立柱建物、土坑等を確認する。9月28日、基準点測量を業者に委託し、メッシュ杭を設置する。10月21日、高所作業車を用いて遺構検出状況の写真撮影を行う。

10月22日、堅穴建物、掘立柱建物、土坑、柱穴の順に掘り下げを行い、同時に遺物や遺構の測量を行い、2000（平成12）年1月27日、遺構の掘り下げや測量を終了する。1月28日、遺構完掘状況写真を撮影するため、調査区の全面精査をする。1月30日、久米高畠遺跡44次調査と合わせた合同の現地説明会を行う。1月31日、高所作業車を用いて遺構完掘状況写真を撮影し、その後、重機を使用して埋め戻しをする。また、同日、発掘用具や機材を撤去して、屋外調査を終了する。

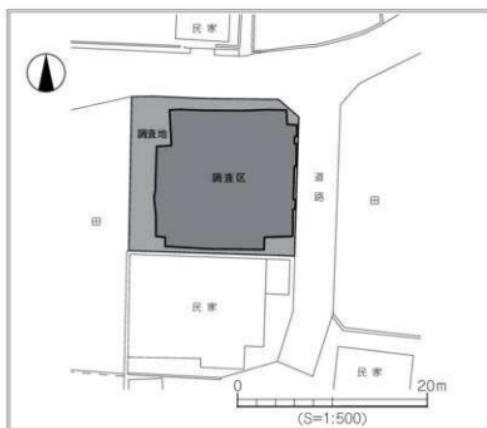
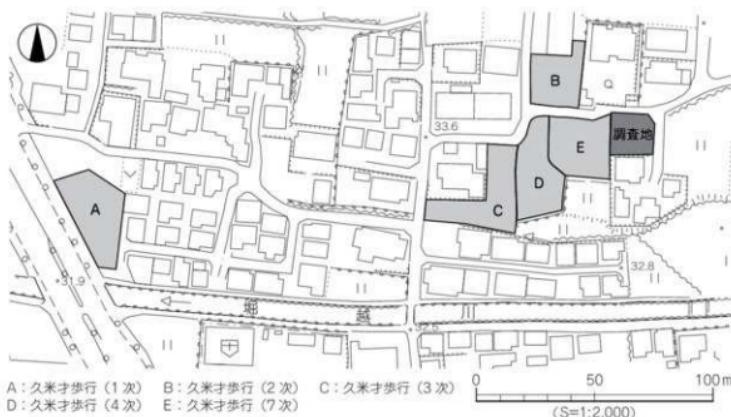
### 3. 調査組織

所 在 地：松山市南久米町 487 番 2

調査期間：1999（平成 11）年 9 月 20 日～2000（平成 12）年 1 月 31 日

調査面積：286.82m<sup>2</sup>

調査主体：松山市教育委員会文化教育課



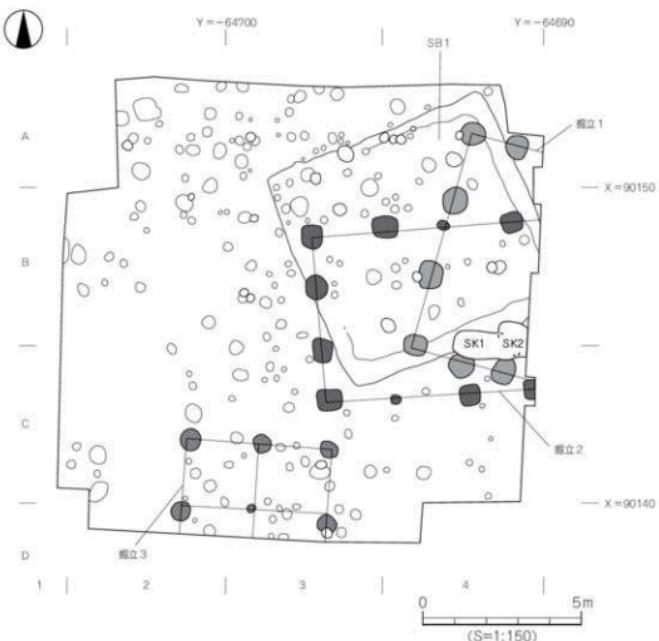
第2図 調査位置図

調査の経緯

調査組織（平成 11 年 4 月 1 日時点）

松山市教育委員会

教育長	池田 高郷
事務局局長	團上 和敬
次長	森脇 将
次長	赤星 忠男
文化教育課課長	松平 泰定
課長補佐	馬場 洋
係長	三好 清二
係長	重松 佳久（調査担当）
臨時	小笠原 彰（調査担当）



第3図 遺構配置図

## 第2節 層位 (第4図)

調査地は松山平野北東部、重信川中流右岸域の小野川扇状地と石手川扇状地の間に形成された洪積台地上標高34.0mに立地する。調査で確認した土層は、以下の三種類（I～III層）である。

第I層：水田耕作に伴う耕作土で調査地北西部以外を除く地域にみられる。暗灰褐色（25Y4/2）を呈するシルトで、層厚7～23cmを測る。

第II層：灰オリーブ色（5Y5/2）を呈するシルトで調査地北西部を除く地域にみられ、層厚2～10cmを測る。

第III層：灰黄褐色土（10YR4/2）で調査地北西部の一部と南東部の一部にみられ、層厚2～12cmを測る。本層上面が、調査における最終遺構検出面である。

検出した遺構や出土遺物より、第III層は古墳時代までに堆積したものと推測される。なお、調査にあたり調査地内を5m四方のグリッドに分けた。グリッドは北から南へA・B・C・D、西から東へ1・2・3・4とし、A1・A2・・・D4といったグリッド名を付けた（第3図）。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げに利用した。

## 第3節 遺構と遺物

検出した遺構は竪穴建物1棟（古墳時代）、掘立柱建物3棟（古墳時代2棟、古代1棟）、土坑2基（中世）、柱穴194基である（第3図）。出土した遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器である。

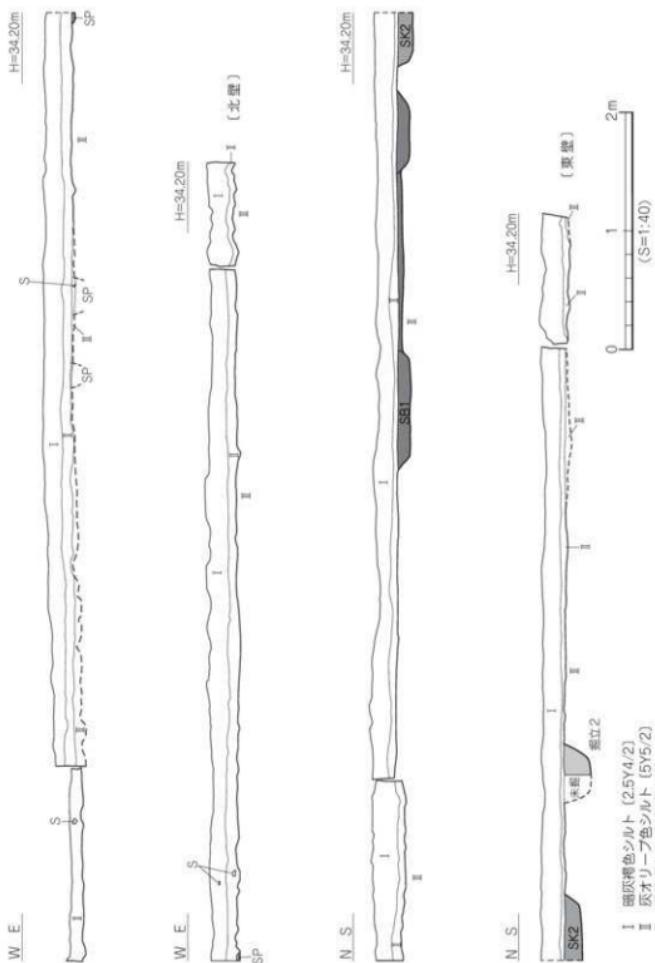
### 1. 竪穴建物

#### S B 1 (第5図、図版3)

調査区北東部、A3～C4区で検出した建物で、掘立1・2と土坑SK1・2に切られ、建物の南東部は調査区外へ続く。第III層上面での検出であり、第II層が覆う。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長7.50m、南北長7.20m、壁高は3～15cmを測る。埋土は黒褐色（10YR2/2）粘質土單層である。内部施設は、主柱穴と周壁溝を検出した。主柱穴は4基（SP23～26）を検出した。平面形態は円形を呈し、規模は径45～50cm、深さ30～35cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒褐色（10YR2/2）粘質土に黄褐色（10YR5/8）シルトがブロック状に混入するものである。遺物は柱穴埋土中より、須恵器片と土師器片が少量出土した。周壁溝は、建物北壁中央部～東壁中央部と南壁東側から南西壁にかけて検出した。幅30～80cm、深さ2～4cmを測る。このほか、SB1床面にて大小44基の柱穴を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径10～60cmを測る。柱穴埋土は、褐灰色土（7.5YR6/1）である。遺物はSB1埋土中より須恵器や土師器、弥生土器のほか石器が出土した。

#### 出土遺物 (第6図、図版5)

1～6は須恵器である。1は壺蓋で、断面三角形状の稜をもつ。2は壺身で、たちあがり端部は内傾し、受部は上外方に短く延びる。3・4は高壺である。3は有蓋高壺の壺部完形品で、たちあがりは内傾し、端部は尖り気味に丸い。受部は上外方に短く延び、脚柱部には長方形状の透かしが3ヶ所みられる。4の脚柱部には、透かしが2ヶ所以上（三方向）とカキメ調整を施す。脚裾部は下内方へ屈曲し、脚



第4図 北壁・東壁土層図

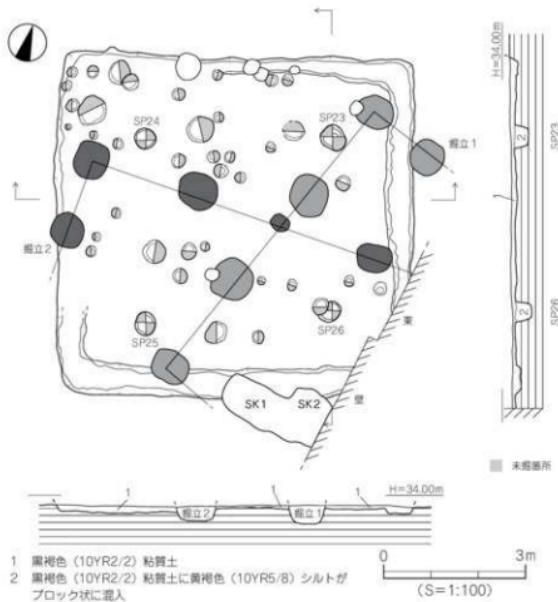
久米才歩行遺跡 6 次調査

端部は丸い。5は甌で、口縁部は緩やかに外反し、端部は欠損する。頭部には、波状文8~10条を施す。6は甌で口縁部は外反し、端部は下方向へ肥厚する。胴部外面にカキメ調整を施す。7・8は土師器である。7は甌で、口縁部は外反し、端部は丸い。頭部内面には明瞭な稜がみられる。8は甌の把手部で、断面形態は橢円形を呈する。

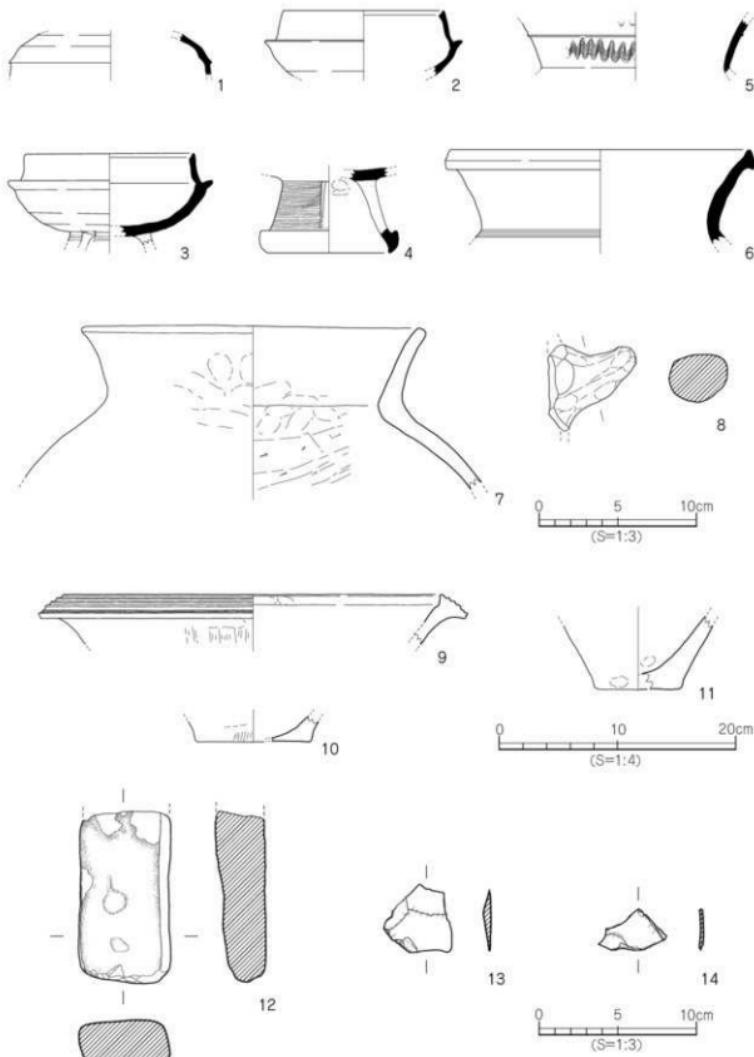
9~11は弥生土器である。9は甌形土器の口縁部小片で、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文4条を施す。10・11は甌形土器の底部で、平底である。9~11は弥生時代中期後半。

12~14は石器である。12は叩石で、刃部には敲打痕が残り、一部に焼けた痕跡を残す。材質は安山岩で、残存長10.9cm、幅5.8cm、厚さ3.1cm、重さ3422gを測る。13・14は剥片で、材質はサスカイトである。13は長さ4.3cm、幅4.3cm、厚さ0.4cm、重さ8.7g、14は長さ2.6cm、幅4.3cm、厚さ0.2cm、重さ2.4gを測る。

時期：出土した須恵器や土師器の特徴から、SB1の廃棄・埋没時期は5世紀後半とする。



第5図 SB1測量図



第6図 SB 1出土遺物実測図

## 2. 掘立柱建物

### 掘立 1 (第 7 図)

調査区北東部 A4 ~ C4 区に位置し、建物東側は調査区外へ続く。掘立 1 は SB1 を切り、SK1・2 に切られている。第Ⅲ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅱ層上面から掘削された遺構である。掘立 1 は 7 基の柱穴 (SP1 ~ 7) で構成される 3 間 × 2 間以上の南北棟で、側柱構造の建物である。規模は桁行長 6.94m、梁行長 2.12 ~ 3.46m、柱穴間隔は 1.30 ~ 2.35m である。

建物を構成する各柱穴の平面形態は円形～梢円形を呈し、規模は径 72.5 ~ 84.0cm、深さ 17 ~ 53cm を測る。柱穴掘り方埋土は四種類に分層され、1 層は灰黄褐色 (10YR4/2) 土、2 層は黒褐色 (10YR2/2) 土、3 層は黒褐色 (10YR2/2) 土に黄褐色 (10YR5/8) 粘質土がブロック状に混入するもの、4 層は黄褐色 (10YR5/8) 粘質土と黒褐色 (10YR2/1) 土の混合土である。柱痕は SP3・4 の 2 基で検出され、規模は径 9.0 ~ 10.5cm、深さ 10 ~ 15cm を測る。柱痕埋土は、黒褐色 (10YR2/1) 粘質土 (5 層) である。遺物は、柱穴掘り方埋土中より須恵器片や土師器片、弥生土器片、石器が出土した。

### 出土遺物 (図版 6)

17・18 は SP1、23 は SP2、16・22 は SP3、15・19 は SP4、20・21 は SP6 出土品。

15 は土師器高坏で口縁部はやや内湾し、端部は丸い。16 ~ 20 は須恵器。16 ~ 19 は、坏蓋の口縁部小片である。16・17 は断面三角形状の稜をもつ。18 は天井部境に沈線 1 条を施し、口縁端部は尖り気味に丸い。19 は天井部境と口縁部内面に沈線 1 条を施し、口縁端部は尖り気味に丸い。20 は有蓋高坏のつまみ部分で、つまみ中央部は凹む。21・22 は弥生土器である。21 は「く」の字状を呈する壺形土器の口縁部で、端部は「コ」字状に仕上げ、胴上部に刺突列点文がみられる。22 は壺形土器で口縁部は外反し、口縁端部は「コ」字状に仕上げ、沈線文 1 条と刻目を 3 ヶ所施す。23 はサヌカイト製の石器剥片で、長さ 1.6cm、幅 2.5cm、厚さ 0.2cm、重さ 1.0 g を測る。

時期：出土した須恵器の特徴と SB1 に後出することから、6 世紀前半以降の建物とする。

### 掘立 2 (第 8 図)

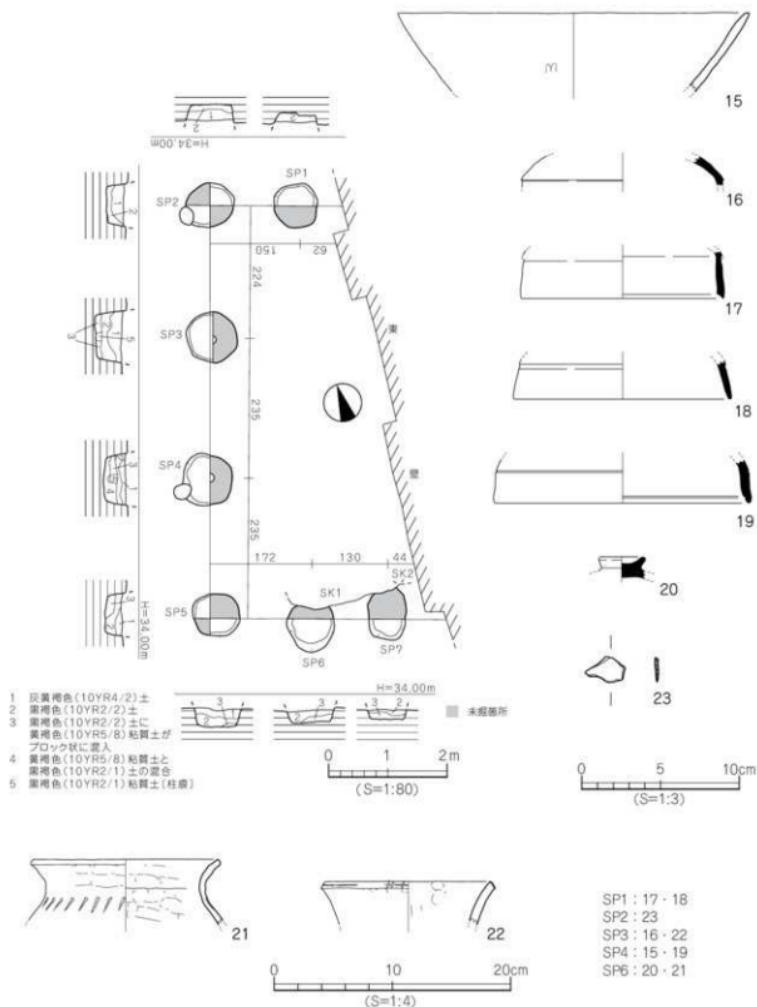
調査区中央部 B3 ~ C4 区に位置し、建物東側は調査区外へ続く。切り合いより、掘立 2 は SB1 より後出する。第Ⅲ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅱ層上面から掘削された遺構である。10 基の柱穴 (SP8 ~ 17) で構成される 3 間 × 3 間以上の東西棟で、側柱構造の建物である。規模は桁行長 6.28 ~ 7.10m、梁行長 5.13m、柱穴間隔は 1.53 ~ 2.36m である。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形～梢円形を呈し、規模は径 34.5 ~ 76.5cm、深さ 8 ~ 33cm を測る。柱穴掘り方埋土は三層に分層され、1 层は灰黄褐色 (10YR4/2) 土、2 層は黒褐色 (10YR2/2) 土、3 層は黒褐色 (10YR2/2) 土に黄褐色 (10YR5/8) 粘質土がブロック状に混入するものである。柱痕は SP8・14・16 の 3 基で検出され、規模は径 10 ~ 15cm、深さ 20cm を測る。柱痕埋土は、黒色 (10YR2/1) 粘質土 (4 層) である。遺物は柱穴掘り方埋土中より須恵器や土師器、弥生土器の小片ほか石器が出土した。

### 出土遺物

25・27 は SP10、28 は SP11、24 は SP12、30 は SP13、26・29 は SP17 出土品。

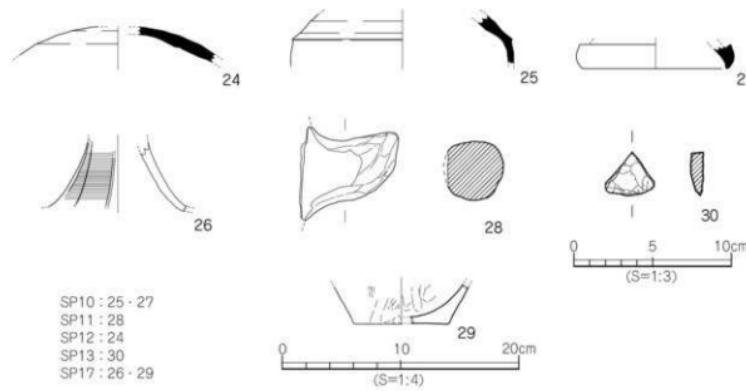
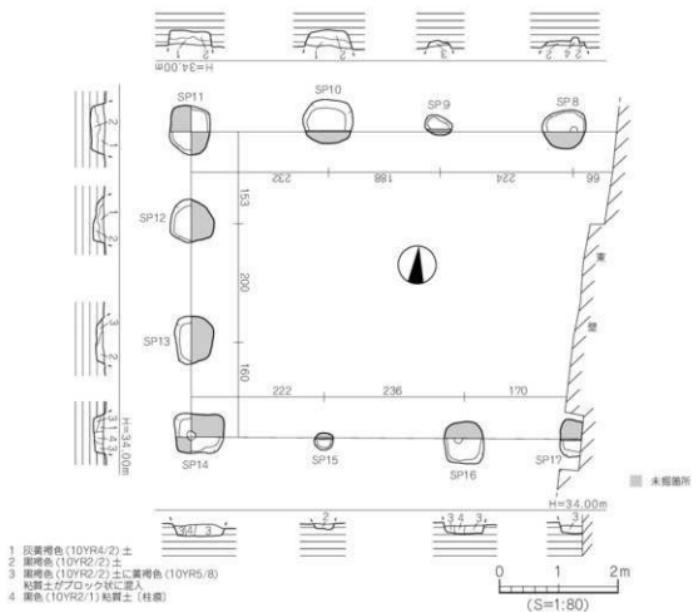
24~27 は須恵器である。24・25 は坏蓋で、24 は天井部が扁平であり、25 は断面三角形状の稜をもつ。

26・27 は高坏の脚部小片で、26 には透かし 2 ヶ所 (三方向) がみられ、27 の端部は丸い。28 は土師器壺の把手部で、断面形態は円形を呈する。29 は弥生土器の壺形土器で、底部は平底である。



第7図 掘立1測量図・出土遺物実測図

久米才歩行遺跡 6 次調査



第8図 掘立2測量図・出土遺物実測図

30はサヌカイト製の石器剥片で、平面形態は正三角形を呈し、長さ2.7cm、幅3.1cm、厚さ0.7cm、重さ6.2gを測る。

時期：出土した須恵器の特徴とSB1に後出することから、6世紀前半以降の建物とする。

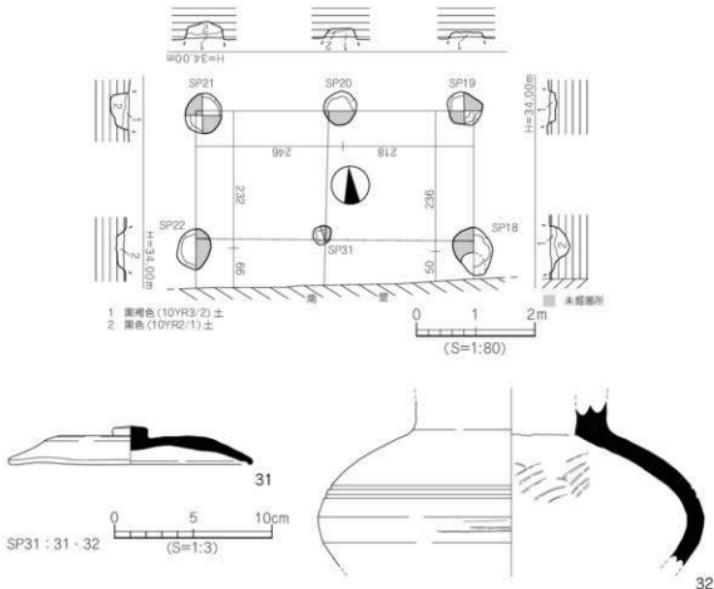
### 掘立3（第9図、図版4）

調査区南側C2～D3区に位置し、建物南側は調査区外へ続く。第Ⅲ層上面での検出であるが、調査壁の土層観察により本来は第Ⅱ層上面から掘削された遺構である。6基の柱穴（SP18～22・31）で構成される2間×1間以上の東西棟で、絶柱構造の建物である。規模は桁行長4.64m、梁行長2.86m、柱穴間隔は2.18～2.46mである。建物を構成する各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径31.0～73.5cm、深さ8～35cmを測る。柱穴掘り方理土は二層に分層され、1層は黒褐色（10YR3/2）土、2層は黒色（10YR2/1）土である。遺物は、SP31より須恵器壺蓋と壺が出土した。

### 出土遺物（図版6）

31・32はSP31出土の須恵器。31は壺蓋の完成品で、天井部は扁平で口縁部は垂下し、端部は丸い。口縁部の一部には、焼け垂みがみられる。32は壺の頸胴部で頸部は直立し、胴部は丸い。胴部中央部には、沈線2条と工具痕がみられる。

時期：出土した須恵器の特徴より古代、7世紀後半以降の建物とする。



第9図 掘立3測量図・出土遺物実測図

### 3. 土坑

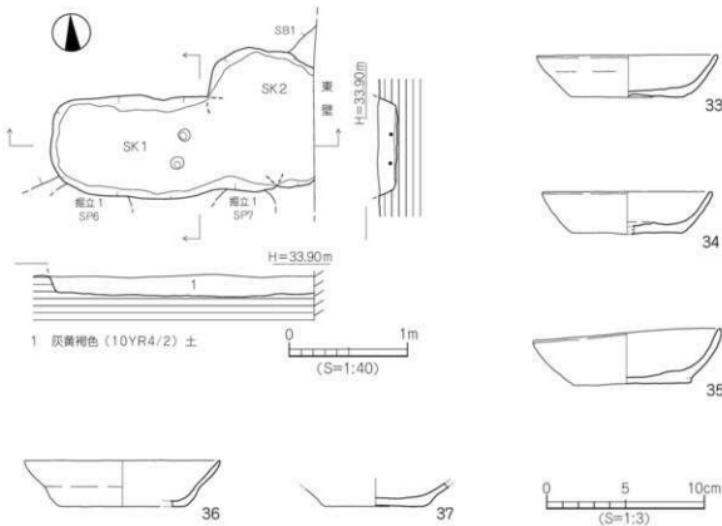
#### SK1・2 (第10図、図版4)

調査区中央部東側B・C4区で検出した2基の土坑であるが、両者の切り合いは判断できなかった。SK1の平面形態は長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.20m、南北長0.83m、深さ13～15cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)土單層である。SK2の平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は径1.20m、深さ10cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)土單層である。遺物は、SK1基底面から土師器坏の完形品が2点(33・35)出土した。SK1は、遺物の出土状況から墓の可能性をもつ構造である。

#### 出土遺物 (図版6)

33～37は土師器の坏。33と35は口縁部が一部欠損するものの、ほぼ完形品で、口縁部はやや内湾し、端部は丸い。33は口径11.3cm、器高2.7cm、底径7.2cmを測り、体部に稜をもつ。35は口径11.8cm、器高3.6cm、底径7.5cmを測る。34は口縁部がやや内湾し、端部は丸い。36は口縁部がやや外反し、端部は丸く、体部に稜をもつ。なお、底部の切り離しは、すべて回転糸切り技法による。

時期：SK1は出土した土師器の特徴より中世・13世紀代とする。なお、SK2については出土遺物がなく時期特定は困難であるが、埋土が酷似することから、概ねSK1と同時期であると考える。



第10図 SK1・2測量図・出土遺物実測図

#### 4. その他の遺構と遺物

調査では遺構内及び掘立柱建物柱穴を除き、194 基の柱穴を検出した。このほか、包含層掘削時や重機掘削時に遺物が出土した。第Ⅲ層中からは古墳時代の土師器や石器、第Ⅱ層中からは近世、江戸時代後期の陶磁器が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは地点不明遺物として取り扱う。地点不明遺物には、弥生時代や古墳時代、古代、中世の遺物が含まれる。

##### (1) 第Ⅱ・Ⅲ層出土遺物（第11図、図版6）

38～41は第Ⅱ層、42～44は第Ⅲ層出土品。

38は陶器蓋の小片で、かえり端部は欠損する。蓋の外面には透明釉が掛けられている。39は磁器紅皿の小片で菊花文様がみられ、外面には透明釉が施されている。40は陶器の瀬戸美濃碗で口縁部は内湾し、端部は丸い。口縁部外面に濃緑色の文様がみられ、外面には透明釉が掛けられている。41は磁器青磁碗の小片で口縁部は内湾し、端部は丸い。外面には、釉薬が掛けられている。38～41は江戸時代後期。42は土師器の甕で口縁部は外反し、口縁端面に刻目が1ヶ所みられる。7世紀。43は円基無茎式の打製石鐵で、材質は赤色珪質岩である。長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ3.1gを測る。平面形態は二等辺三角形を呈し、表面には自然面を残す。44はサスカイト製の剥片で、長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.6cm、重さ3.1gを測る。

##### (2) 地点不明出土遺物（第12図、図版6）

45～50は弥生土器。45・46は甕形土器。45は折曲口縁で口縁端部に刻目、胴部に櫛描き沈線文12条(4条1組×3条)と刺突文を施す。弥生時代前期末～中期初頭。46は「く」の字状を呈する口縁部で、口縁端部は「コ」字状をなす。弥生時代中期後半。47・48は壺形土器である。47は広口壺の口縁部小片で、口縁端面に四線文3条を施す。弥生時代中期後半。48は胴部小片で、ヘラ描きによる3条の斜格子目文を施す。弥生時代前中期後半。49・50は甕形土器の底部で、49は上げ底、50はわずかに上げ底をなす。弥生時代後期。

51・52は須恵器。51は壺の底部で、高台はわずかに「ハ」の字状に開き、端部は凹む。7世紀後半。52は高壺の脚部で、台形状の透かしが3ヶ所みられる。5世紀後半～末。53・54は土師器。53は壺の底部で、底部切り離しは回転糸切り技法である。12～13世紀。54は土釜の脚部片で、断面形態は円形状を呈する。14～15世紀。

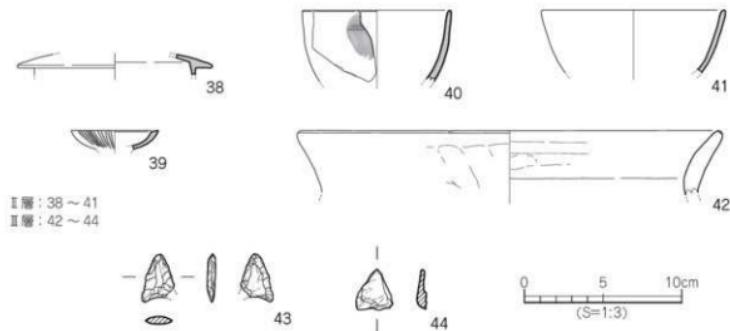
## 第4節 小 結

久米才歩行遺跡6次調査では古墳時代から中世までの遺構と、弥生時代から近世までの遺物が出土した。以下、時代ごとに略記する。

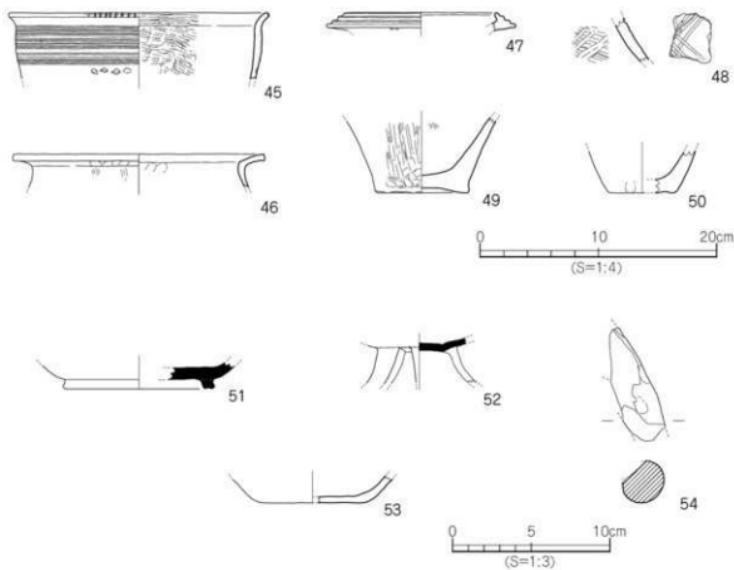
### 1. 弥生時代

遺構は未検出であるが、遺物は弥生時代前期末や中期後半から後期の土器や石器が出土している。調査地周辺では、久米才歩行遺跡4次調査にて弥生時代前期末の自然流路1条、同2次調査では弥生時代前期末～中期初頭の竪穴建物1棟と土坑1基、弥生時代中期中葉の土坑2基、同1次調査では弥

久米才歩行遺跡 6 次調査



第11図 第II・III層出土遺物実測図



第12図 地点不明出土遺物実測図

生時代中期末の土器つまり、同5次調査では弥生時代の溝2条と性格不明遺構1基のほか弥生時代以降の土坑1基を検出している。

## 2. 古墳時代

遺構は5世紀後半の堅穴建物1棟(SB1)と、6世紀前半以降の掘立柱建物2棟(掘立1・2)を検出した。SB1は一辺7.20～7.50mを測る隅丸方形の堅穴建物で、4本柱構造の建物である。内部には、幅60cmを測る周壁溝が巡っている。掘立1・2は、前述のSB1埋没後に構築された側柱構造の建物で、建物を構成する柱穴は円形や楕円形を呈する。掘立1は7基の柱穴(SP1～7)で構成される3間×2間以上の東西棟で、規模は桁行長6.94m、梁行長2.12～3.46m、柱穴間隔は1.30～2.35mである。掘立2は10基の柱穴(SP8～17)で構成される3間×3間以上の東西棟で、規模は桁行長6.28～7.10m、梁行長5.13m、柱穴間隔は1.53～2.36mである。柱穴出土品より、2棟の建物は古墳時代後期、6世紀前半以降の建物と考えられる。

調査地周辺では久米才歩行遺跡2次調査において、古墳時代の土坑1基、古墳時代後期の堅穴建物1棟、溝1条、土坑3基を検出し、同4次調査では古墳時代後期の性格不明遺構4基と古墳時代から古代の自然流路1条が検出されている。また、同5次調査でも古墳時代中期の堅穴建物2棟、古墳時代中期末から後期初頭の掘立柱建物1棟、古墳時代後期の掘立柱建物3棟、横列1条を検出しているほか古墳時代以降では溝1条が検出されている。

## 3. 古代

本調査では、7世紀後半の掘立柱建物1棟(掘立3)を検出した。掘立3は2間×1間以上を測る純柱建物で、柱穴内からは、ほぼ完形の須恵器壊蓋が出土した。久米才歩行遺跡2次調査と3次調査からは7世紀前半の掘立柱建物や溝・土坑のほか、8世紀代の溝が検出されている。

## 4. 中・近世

中世の遺構は土坑2基(SK1・2)を検出し、このうち、SK1は長さ2.20m以上、幅83cmを測る長方形土坑で、土坑基底面より完形の土師器壊2点が出土した。出土状況から、SK1は土坑墓の可能性がある遺構である。一方、近世の遺構は未検出であるが、包含層中より遺物が出土している。なお、久米才歩行遺跡2次～5次調査からは、中世、13世紀から近世までの掘立柱建物や溝、土坑が数多く検出されている。

本調査地を含めた周辺地域は、弥生時代から古墳時代、古代、中世を通して長期にわたり集落が営まれていたことが明らかになってきた。今後は、各時代における集落構造や変遷を解明することが必要となる。なお、今回の調査では、官衙成立以前の来住台地周辺部における土地利用の状況を検証することができ、洪積台地上においては、官衙施設が計画的に造営されている来住台地とは異なり居住域として継続的に利用されていることを想定することができた。

## 遺構一覧・遺物観察表 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 天井部、口→口縁部、胴→胴部、頸→頸部、底→底部、脚→脚部。

胎土・焼成欄

胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) → 「1~4mmの大石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。○⇒良好、○⇒良、△⇒不良。

表2 突穴建物一覧

突穴(SB)	地区	平面形	規格	長さ×幅×深さ(m)	埋土	内部施設	出土遺物	時期	備考
1	A3~C4	隅丸方形	750×720×0.03~0.15	黒褐色粘質土	主柱穴・周壁溝	弥生・土師 須恵・石器	5世紀後半	掘立1・2とSK1・ 2に切られる	

表3 据立柱建物一覧

据立	地区	方位	規格(間)	桁行長(m)	梁行長(m)	床面積(m)	柱穴埋土	出土遺物	時期	備考
1	A4~C4	南北	3×(2)	694	2.12~3.46	24.01	灰黄褐色土	施 須恵・石器	6世紀前半以降	SB1に切り SK1・2に切られる
2	B3~C4	東西	3×(3)	628~710	513	36.42	灰黄褐色土	施 須恵・石器	6世紀前半以降	SB1を切る
3	C2~D3	東西	2×(1)	464	286	13.27	黒褐色土	施 須恵	7世紀後半以降	

表4 土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規格	長さ×幅×深さ(m)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B-C4	長方形	逆台形状	(2.20) × 0.83	× 0.13~0.15	灰黄褐色土	土師	13世紀	
2	B-C4	(円形)	逆台形状	1.20 × 1.20	× 0.10	灰黄褐色土	—	13世紀	

表5 SB1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面)	胎土 焼成	備考	団別
				外 面	内 面				
1	壺蓋	残高 27	断面三角形状の棲をもつ。	⑤回転ヘラケズリ 回転ナデ		青灰色 青灰色	密 ○		5
2	环身	10.1 残高 42	たちあがり端部は内傾し、受部は上 外方に短く延びる。	⑦回転ナデ ⑨輪ヘラケズリ		青灰色 青灰色	密・黒色化土粒 ○		5
3	高环	10.6 残高 58	环部完結したあがりは内傾し、端部は 尖り気味に丸い。受部は外方に短く延び る。脚部は方形形の透かし三方向あり。	①回転ナデ ⑩輪ヘラケズリ ⑨キメ	②回転ナデ ⑩輪ヘラケズリ ⑨キメ	灰白色 灰白色	密 ○		5
4	高环	7.7 残高 54	脚部は丸かし2ヶ所以上(三方向)と カキメ調整を施す。脚部は下内方へ傾 曲し、脚部は丸い。	カキメ	回転ナデ→ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		5
5	施	残高 36	口縁部は継やかに外反し、端部は欠損す る。口縁部に波状約8~10条を施す。	回転ナデ		灰白色 暗灰色	密 ○		5
6	甕	18.8 残高 60	口縁部は外反し、端部は下方に肥厚する。 脚部外方にカキメ調整を施す。	⑩回転ナデ ⑧カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ○		5
7	甕	10.2 残高 10.2	口縁部は外反し、端部は丸い。頭部 内面に棲をもつ。	⑩ヨコナデ ⑨ナデ	⑩ナデ(マメフ) ⑨板ナデ	明茶色 明茶色	石・長径~2 ○		5
8	瓶	残高 54	把手部。断面形態は楕円形。	ナデ	—	褐褐色 褐褐色	石・長径~2全 ○		5
9	甕	31.6 残高 42	小片。口縁端部は上下方に抵張し、 端面に凹線4条を施す。	⑩ナデ ⑩ハケ(マメフ)	ナデ(マメフ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長径~2全 ○		5
10	甕	19.0 残高 21	底径平底。	ハケ(マメフ)	ナデ(マメフ)	淡褐色 淡褐色	石・長径~2全 ○		
11	甕	7.3 残高 62	平底。	ナデ(マメフ)	ナデ	淡茶褐色 暗茶褐色	石・長(1~5) ○		

遺物観察表

表6 SB1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
12	叩石	基部を欠損	安山岩	109	58	3.1	3422	5
13	剥片	完形	サスカイト	43	43	0.4	8.7	5
14	剥片	完形	サスカイト	26	43	0.2	2.4	5

表7 掘立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
15	高坏	口径(22.0) 残高 5.0	口縁部は内溝し、端部は丸い。	ナデ一部ミガキ(マメツ)	ナデ(マメツ)	明褐色 明褐色	石・長(1~2)全 ○	SP4	
16	环蓋	残高 1.9	断面三角形状の棱をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	SP3	
17	环蓋	口径(12.7) 残高 3.0	断面三角形状の棱をもつ。口縁端部は内側する段をもつ。小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	青 ○	SP1	6
18	环蓋	口径(13.6) 残高 2.5	天井部端に口縁部に沈線1条を施す。口縁端部は夷り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	青 ○	SP1	6
19	环蓋	口径(16.0) 残高 2.7	天井部端と口縁部内間に沈線1条を施す。口縁端部は夷り気味に丸い。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	SP4	6
20	高坏	口径(2.6) 残高 1.4	有蓋高杯のつまみ部で、中央部が凹む。	回転ナデ	ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	SP6	6
21	甕	口径(15.5) 残高 5.5	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」字状に仕上げ。胴部に刺突点文がみられる。	ヨコナデ(マメツ)	ナデ・ヨコナデ(マメツ)	橙茶色 橙茶色	石・長(1~3) ○	SP6	6
22	甕	口径(13.8) 残高 3.6	口縁部は斜反し、口縁端部に「コ」字状に仕上げ、沈線1条と削り3ヶ所を施す。	マメツ(ナデ・ヨコナデ)	ナデ(マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 角閃石(△)	SP3	

表8 掘立1出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
23	剥片	完形	サスカイト	1.6	25	0.2	1.0	SP 2

表9 掘立2出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
24	环蓋	残高 2.3	扁平な天井部。	回転ヘラケズリ	回転ナデ→ナデ	灰色 青灰色	青 ○	SP12 自然釉	
25	环蓋	残高 3.2	断面三角形状の棱あり。	④回転ヘラケズリ ⑤回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	SP10	
26	高坏	残高 4.4	脚部片。透かし2ヶ所(三方向)がみられる。	カキメ・回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	青・黑色化粧土粒 ○	SP17	
27	高坏	底径(9.2) 残高 1.6	脚部は下内方へ屈曲。小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	青 ○	SP10	
28	甕	残高 5.9	把手部。断面円形。	ナデ(マメツ)	—	稻青茶色 稻青茶色	青 ○	SP11	
29	甕	底径(8.0) 残高 3.3	平底。	ミガキ・ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	乳褐色 褐色	石・長(1~2)金 ○	SP17 黒斑	

表10 掘立2出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法量			備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)		
30	剥片	完形	サスカイト	2.7	31	0.7	6.2	SP13

表11 掘立3出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)	胎土焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
31	环蓋	口径(2.2) 口徑(1.8) 残高 2.5	完全形。天井部は水平で、口縁部は斜け込みがみられる。口縁部は焼けた。	⑥回転ナデ ⑦回転ヘラケズリ ⑧回転ナデ	⑨回転ナデ ⑩回転ヘラケズリ ⑪回転ナデ	灰白色 灰白色	青 ○	SP31	6
32	甕	残高 10.4	頭部は直立。胴部は丸い。胴部に沈線2条と工具痕を施す。	⑫回転ナデ ⑬回転ヘラケズリ ⑭回転ヘラケズリ	⑮回転ナデ ⑯回転ヘラケズリ ⑰回転ヘラケズリ	灰色 灰色	青 ○	SP31 自然釉	6

## 久米才歩行遺跡 6 次調査

表 12 SK1 出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
33	坏	口径 11.3 底径 7.2 器高 27	底部切り離しは、回転糸切り技法による。ほぼ完品。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白色	密・金 ○		
34	坏	口径 10.6 底径 7.0 器高 27	底部切り離しは、回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳褐色 乳白色	密 石・長 (1~2) ○		
35	坏	口径 11.8 底径 7.5 器高 36	口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形品。底部切り離しは回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ○	6	
36	坏	口径 12.4 底径 7.8 器高 29	体部中央に棱があり。底部切り離しは、回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙黄色 淡橙黄色	密・金 ○		
37	坏	底径 6.1 残高 1.5	底部切り離しは、回転糸切り技法による。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡橙黄色 淡橙黄色	密・金 ○		

表 13 第Ⅱ層・Ⅳ層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
38	蓋	残高 1.3	陶器。かえり端部は欠損する。小片。透明釉。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰黃色 灰黃色	密 ○	Ⅱ層	
39	皿	口径 5.5 残高 1.2	磁器の紅皿。外面に菊花文様がみられる。小片。透明釉。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ○	Ⅱ層	6
40	碗	口径 9.2 残高 4.3	陶器の画戸美濃碗。内湾口縁で端部は丸い。外面に濃緑色の文様あり。	回転ナデ	回転ナデ	灰黃色 灰黃色	密 ○	Ⅱ層	6
41	碗	口径 11.5 残高 4.0	磁器の青磁碗。内湾口縁で端部は丸い。小片。淡緑色釉。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	Ⅱ層	
42	甕	口径 26.4 残高 4.1	口縁部は外反し、端部は丸い。端面に削目が1ヶ所みられる。	ナデ	ヨコナデ	赤褐色 赤褐色	密 石・長 (1) ○	Ⅲ層	

表 14 第Ⅲ層出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量			備 考	図版
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
43	打製石錐	一部欠損	赤色珪質岩	30	20	0.4	31	円基無茎式 6
44	洞 片	完 形	サスカイト	25	23	0.6	31	6

表 15 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
45	甕	口径 21.7 残高 5.6	凸面口縁。口縁端部に削目。側面部に鉛錆及び沈没線 12 条 (4 条 1 直 × 3 条) と刻文を施す。小片。	ヨコナデ	ミガキ・ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) 金 ○		6
46	甕	口径 21.0 残高 2.8	「く」の字状の口縁部。口縁端部は「コ」字状をなす。	ヨコナデ ハゲ	ナデ (マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長 (1~2) ○		
47	甕	口径 12.5 残高 1.5	口縁端部に凹面線 3 条を施す。小片。ハケ (マメツ)	ナデ (マメツ)	ナデ (マメツ)	黄褐色 黄褐色	長 (1) ○		
48	甕	残高 3.7	ヘラ引き斜格子目文を施す。小片。ナデ・ミガキ	ミガキ	ミガキ	乳茶褐色 黒色	石・長 (1~2) 金 ○		6
49	甕	底径 7.7 残高 6.3	上げ底。	ハケ→ミガキ・ナデ	ハケ (マメツ)	褐褐色 褐褐色	石・長 (1~4) ○		
50	甕	底径 5.7 残高 3.5	むずかに上げ底。	ナデ	ナデ	淡橙褐色 茶褐色	石・長 (1~3) 黒斑 ○		
51	坏	底径 9.2 残高 1.7	高台坏。高台は、むずかに「ハ」の字状に開き、脚端部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
52	高坏	底径 2.8	高坏の脚部。台形状の造かしが 3ヶ所みられる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○		
53	坏	底径 6.8 残高 1.7	底部の切り離しは、回転糸切り技法である。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色 乳白色	密・金 ○		
54	土釜	残高 7.1	脚部片。断面円形。	ナデ	—	赤茶褐色	石・長 (1~2) 金 保付着 ○		

## 第3章 南久米斎院遺跡1次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第13図）

1989（平成元）年10月5日、山下調三氏より松山市南久米町635番2、635番4における木造住宅建設に伴う埋蔵文化財の確認願が松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。

確認願が提出された申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地『No.127 久米官衙遺跡群（旧来住庵寺跡）』内にある。同包蔵地内では、申請地西側に久米高畠遺跡、南西側に来住庵寺、南には来住町遺跡など数多くの発掘調査が行われており、弥生時代から中近世までの集落関連遺構や遺物が多数確認されている。

1989（平成元）年11月10日～11月18日の間に、文化教育課は試掘調査を実施した。調査では土坑1基と柱穴6基のほか、弥生土器や須恵器の破片が出土した。この結果を受け、申請者と文化教育課は遺跡の取り扱いについて協議を行い、住宅建設により失われる遺構・遺物に対し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は来住台地北側の地域に展開する集落の広がりや、『史跡久米官衙遺跡群、来住庵寺跡』に関連する遺構の解明を主目的とし、文化教育課が主体となり、1990（平成2）年1月13日より開始した。

#### 2. 調査の経緯

発掘調査は、1990（平成2）年1月13日から同年3月15日までの間に実施した。以下、調査工程を略記する。

1990（平成2）年1月13日、調査地内に発掘道具一式を搬入する。1月16日、申請者の立会いのもとに調査区を設定し、調査を開始する。調査区内を全面精査し、1月17日、精査を終了する。1月18日、包含層の掘り下げを人力で開始し、1月29日に掘り下げを終了する。同日、調査区を全面精査し、遺構検出状況写真の撮影を行う。遺構は地山上面において柱穴を確認し、遺物は包含層中から縄文土器や弥生土器、石器が出土した。2月14日、調査区内を全面精査し、翌日、全景写真を撮影する。2月22日、柱穴の掘り下げと測量を開始し、2月28日に終了する。3月2日、遺構完掘状況写真の撮影を行い、3月14日、すべての測量作業を終了する。3月15日、発掘用具や機材を撤去して、屋外調査を終了する。

#### 3. 調査組織

所 在 地：松山市南久米町635番2、635番4

調査期間：1990（平成2）年1月13日～同年3月15日

調査面積：318.25m<sup>2</sup>

土地所有者：山下調三

調査組織（平成2年1月1日時点）

松山市教育委員会

教育長	池田 尚郷	埋蔵文化財センター所長	森脇 将
事務局参事	古本 克	調査係長	西尾 幸則(調査担当)
次長	井上 量公	主任	田城 武志
次長	一色 正士		水本 完児(調査担当)
文化教育課課長	波部 忠平		
課長補佐	大野 衛治		
係長	西 伸二		

## 第2節 層位

### 1. 基本層位（第14～16図）

調査地は松山平野北東部、来住舌状台地東部北端に位置し、堀越川右岸の緩やかに北西に斜降する洪積台地上、標高39.30～40.55mに立地する。調査地の基本層位は、以下の六層に分層される。

第I層は、土色・土質の違いで二種類に分層される。

第I①層：近現代の造成に伴う客土で、層厚5～90cmを測る。調査区北西部を除く地域で検出した。

第I②層：近現代の農耕に伴う耕土で、層厚3～33cmを測る。調査区北部を除く地域で検出した。

第II層は、土色・土質の違いで四種類に分層される。各層共に、水平堆積をなす。

第II①層：灰色土で調査区北側を除くほぼ全域にみられ、層厚2～8cmを測る。

第II②層：褐色土で調査区北側全域と南西部を除くほぼ全域にみられ、層厚2～10cmを測る。

第II③層：茶褐色土で調査区南西部にみられ、層厚2～8cmを測る。

第II④層：暗褐色土で調査区南西部にみられ、層厚2～11cmを測る。

第III層は、土色の違いで二種類に分層される。両層は、傾斜堆積をなす。

第III①層：黒色土に暗褐色土粒が混入するもので層厚3～55cmを測り、調査区西半部で検出した。本層中からは、主に弥生時代中期の土器片が出土した。なお、平面精査では未検出であるが、調査壁の土層観察により、本層上面にて溝1条（SD1）を確認した。

第III②層：黒色土で層厚3～30cmを測り、調査区西半部で検出した。本層中からは、縄文土器や弥生土器が出土した。なお、調査壁の土層観察により、本層下面にて倒木址3基（倒木1～3）を検出したほか、本層上面にて倒木址1基（倒木4）を検出した。

第IV層は、土色・土質の違いで三種類に分層される。各層は、傾斜堆積をなす。

第IV①層：灰色土に茶色土が混入するもので、層厚2～20cmを測る。調査区北西部で検出した。

第IV②層：暗黄色土に暗灰色土粒が混入するもので、層厚2～34cmを測り、調査区西半部にて部分的にみられる。

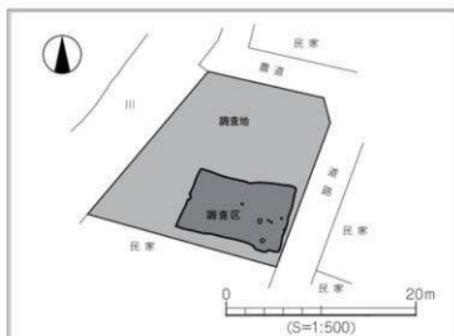
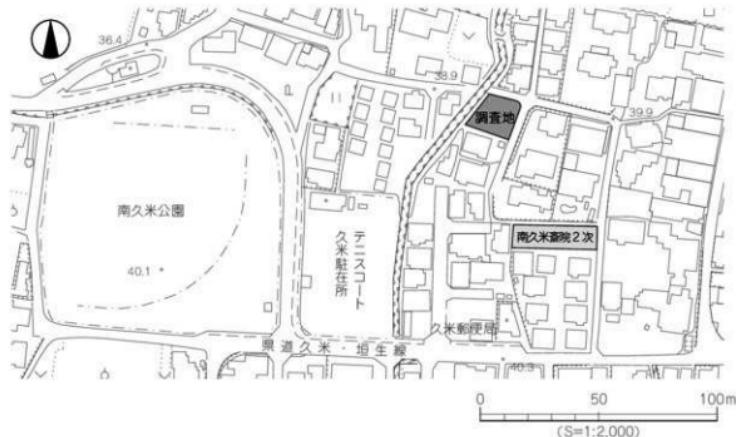
第IV③層：暗黄色土で層厚4～17cmを測る。調査区西半部にて、部分的にみられる。

四 位

第V層：明黄色土で、層厚2~23cmを測る。調査区全域にみられるが、南西部は部分的に検出した。本層上面は、調査における最終遺構検出面である。

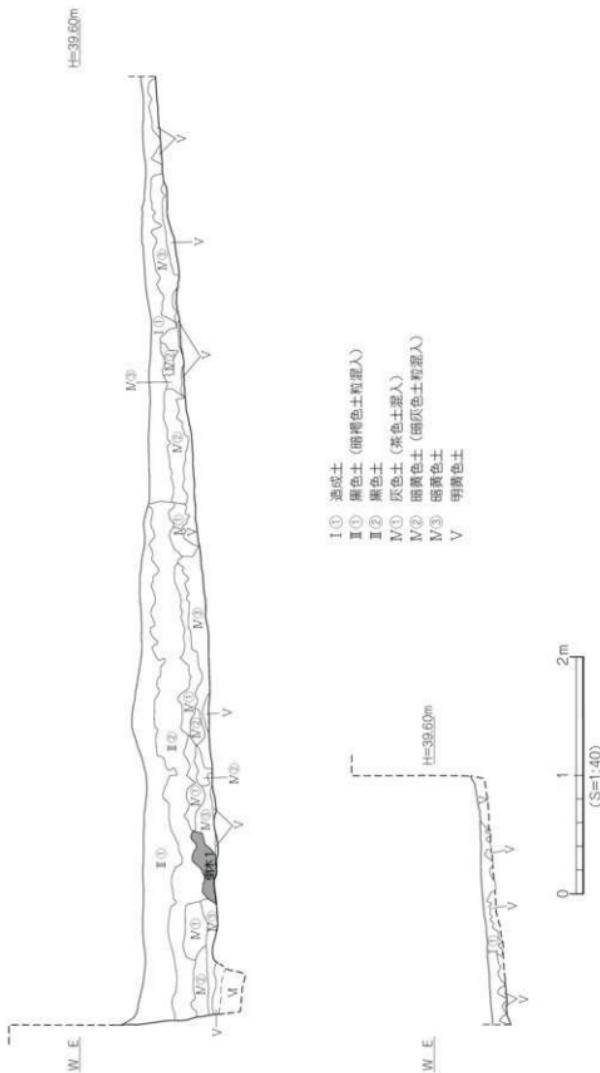
第 VI 層：明灰色粘質土で調査区西半部でみられ、層厚 40cm 以上を測る。

検出した遺構や出土遺物より、第Ⅲ①層は弥生時代中期、第Ⅲ②層は弥生時代前期までに堆積した土層と考えられる。なお、調査にあたり調査地内に3m四方のグリッドを設定した。グリッドは東から西へA・B・C・D・E、北から南へ1・2・3・4とし、A1・A2・・・E4といったグリッド名を付けた。グリッドは、遺構の位置表示や遺物の取り上げ等に使用した。



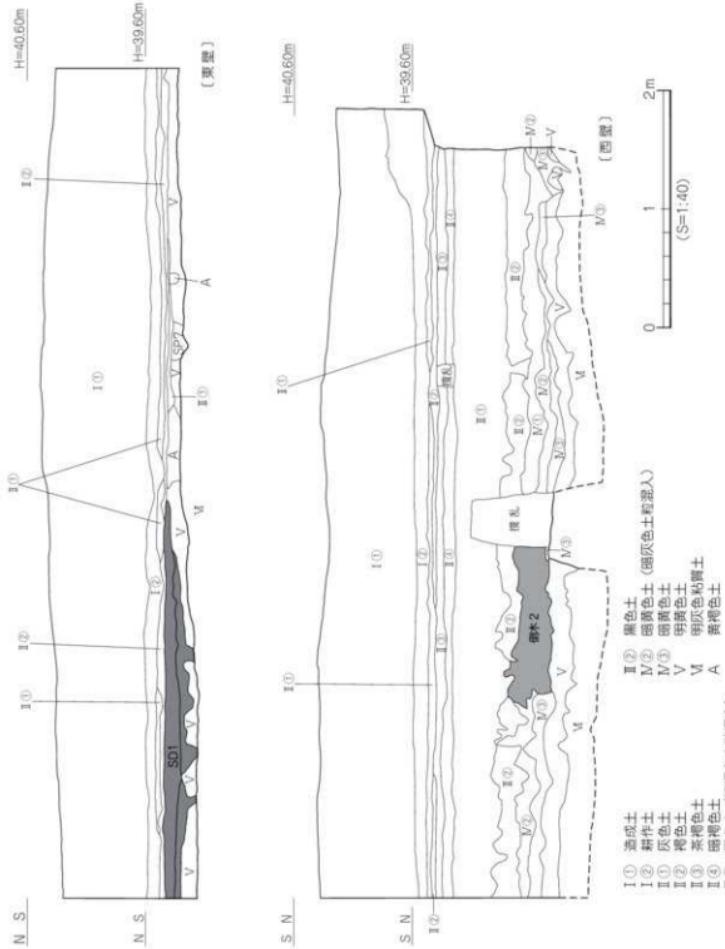
第13図 調査地位図

南久米斎院遺跡 1次調査

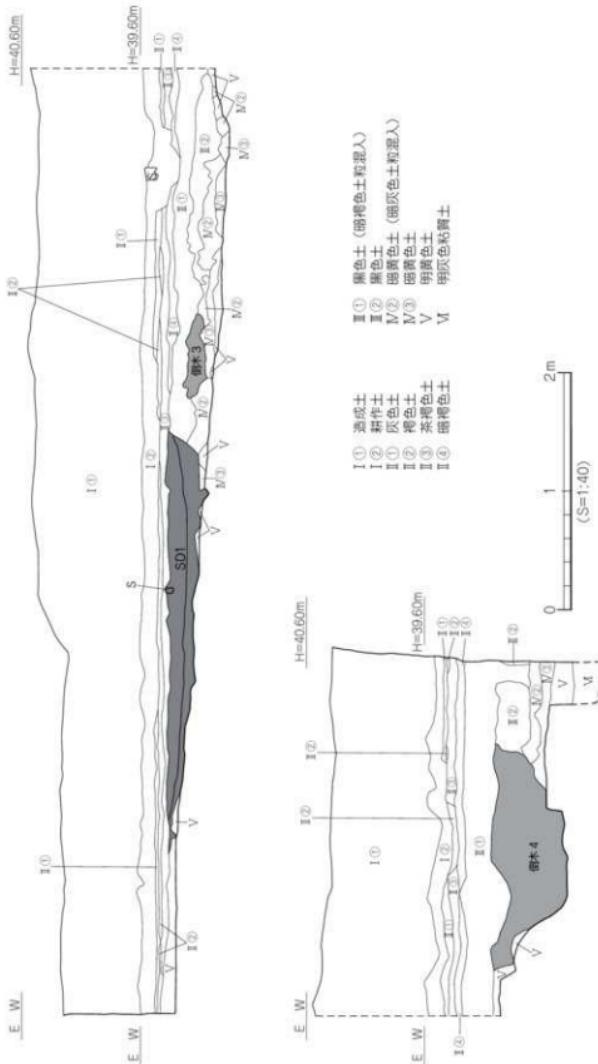


第14図 北壁土層図

層位

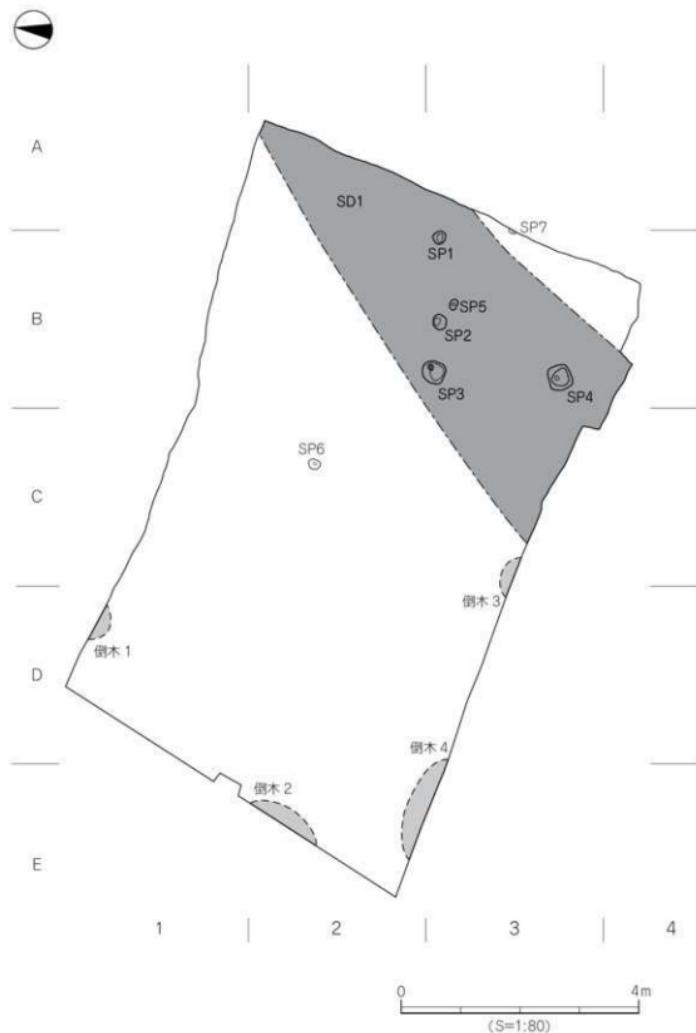


第15圖 東壁·西壁土層圖



第16図 南壁土層図

層位



第 17 図 遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物（第17図）

遺構は、柱穴7基を検出した。すべて、第V層上面での検出である。また、平面では検出されなかつたが、調査壁の土層観察により、溝1条と倒木址4基を確認した。遺物は、柱穴内から弥生土器片、包含層中からは縄文時代晚期から弥生時代中期の土器片や石器が出土した。

#### 1. 溝

##### S D 1

調査区南東部A2～C4区で検出した北東～南西方向の溝であるが、調査壁の土層観察により確認した。溝の想定範囲を第17図に掲載した。第III①層上面から掘り込まれており、第II②層が覆う。深さは最深部で28cmを測り、断面形態はレンズ状を呈する。埋土は二種類あり、上層は灰色砂礫、下層は灰色砂礫に茶褐色土が混入するものである。

**時期：**出土遺物がなく時期特定は困難であるが、第III①層上面から掘り込まれていることから、概ね弥生時代中期以降の溝とする。

#### 2. 柱穴（第18図）

調査では、第V層上面にて7基の柱穴を検出した。柱穴掘り方埋土は、すべて黒色土である。なお、2基の柱穴（SP3・4）にて柱痕を検出したが、柱痕埋土は掘り方埋土と同様である。

##### S P 1

調査区南東部B3区に位置する柱穴で、平面形態は円形を呈し、規模は長径47cm、短径43cm、深さ15cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱穴内からは、遺物は出土していない。

##### S P 2

調査区南東部B3区に位置する柱穴で、平面形態は円形を呈し、規模は長径53cm、短径48cm、深さ45cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱穴内からは弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

##### S P 3

調査区南東部B2・3区に位置する柱穴で、平面形態は円形を呈し、規模は長径79cm、短径73cm、深さ50cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱痕は径16.5cm、深さ63cmを測る。柱穴掘り方埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

##### S P 4

調査区南東部B3区に位置する柱穴で、平面形態は梢円形を呈し、規模は長径91cm、短径88cm、深さ47cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱痕は径15cm、深さ50cmを測る。柱穴内から、遺物は出土していない。

##### S P 5

調査区南東部B3区に位置する柱穴で、平面形態は梢円形を呈し、規模は長径38cm、短径27cm、深さ42cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱穴内から、遺物は出土していない。

##### S P 6

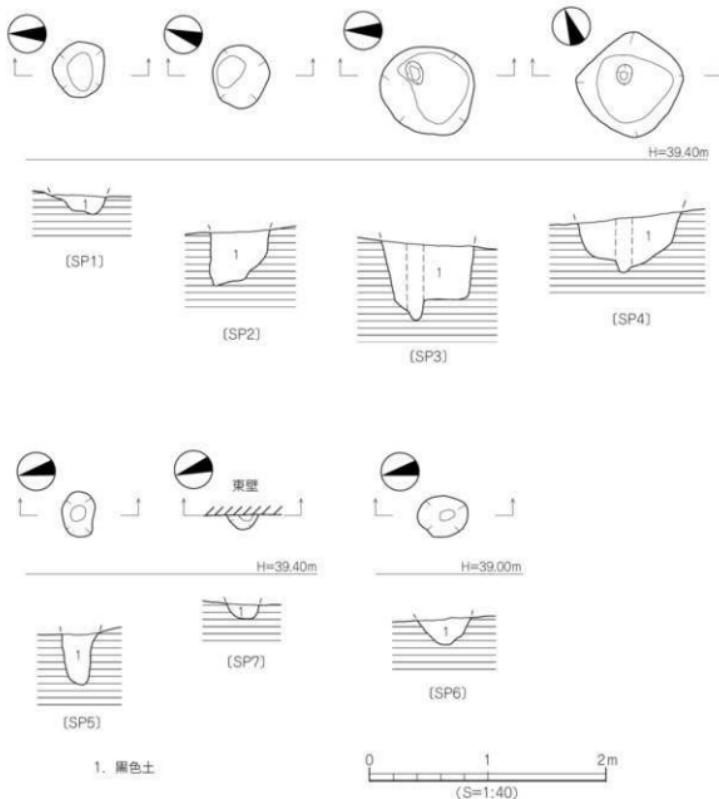
調査区中央部C2区に位置する柱穴で、平面形態は円形を呈し、規模は長径43cm、短径35cm、深

さ22cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱穴掘り方埋土中より弥生土器片が数点出土したが、図化しうるものはない。

## S P 7

調査区南東部 A・B3 区に位置し、柱穴東側は調査区外へ続く。第V層上面の検出であり、第Ⅲ①層が覆う。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長12cm、南北長26cm、深さ12cmを測る。柱穴掘り方埋土は、黒色土単層である。柱穴内から、遺物は出土していない。

時 期：時期特定しうる遺物の出土はないが、SP7の上面を第Ⅲ①層が覆うことや、すべての柱穴掘り方埋土がSP7と酷似することなどから、SP1～7は概ね弥生時代中期以前の柱穴とする。



第18図 柱穴測量図

### 3. 倒木址

調査では、4基の倒木址を確認した。平面精査では検出されておらず、すべて調査壁の土層観察により確認したものである。なお、倒木址から遺物の出土はない。

#### 倒木1

調査区北西部D1区に位置する倒木址で、検出長0.62m、厚さ20cmを測る。倒木埋土は、第IV③層（暗黄色土）に明灰色粘質土が混入するものである。なお、倒木上面は第III②層が覆う。

#### 倒木2

調査区南西部E1・2区に位置する倒木址で、検出長1.35m、厚さ40cmを測る。倒木埋土は、第IV③層（暗黄色土）に茶色土と灰黄色土が混入するものである。なお、倒木上面は第III②層が覆う。

#### 倒木3

調査区南壁中央部C・D3区に位置する倒木址で、検出長0.70m、厚さ20cmを測る。倒木埋土は、第III②層（黒色土）に灰色土と灰黄色土が混入するものである。なお、倒木上面は第III①層が覆う。

#### 倒木4

調査区南西部E2・3区に位置する倒木址で、検出長1.90m、厚さ62cmを測る。倒木埋土は、第III②層（黒色土）に暗黄色土と暗灰色土が混入するものである。なお、倒木上面は第III①層が覆う。

**時 期**：出土遺物がなく時期特定は困難であるが、倒木1・2は第III②層が覆うことから、弥生時代前期以前、倒木3・4は第III①層が覆うことから、弥生時代中期以前とする。

### 4. その他の遺構と遺物

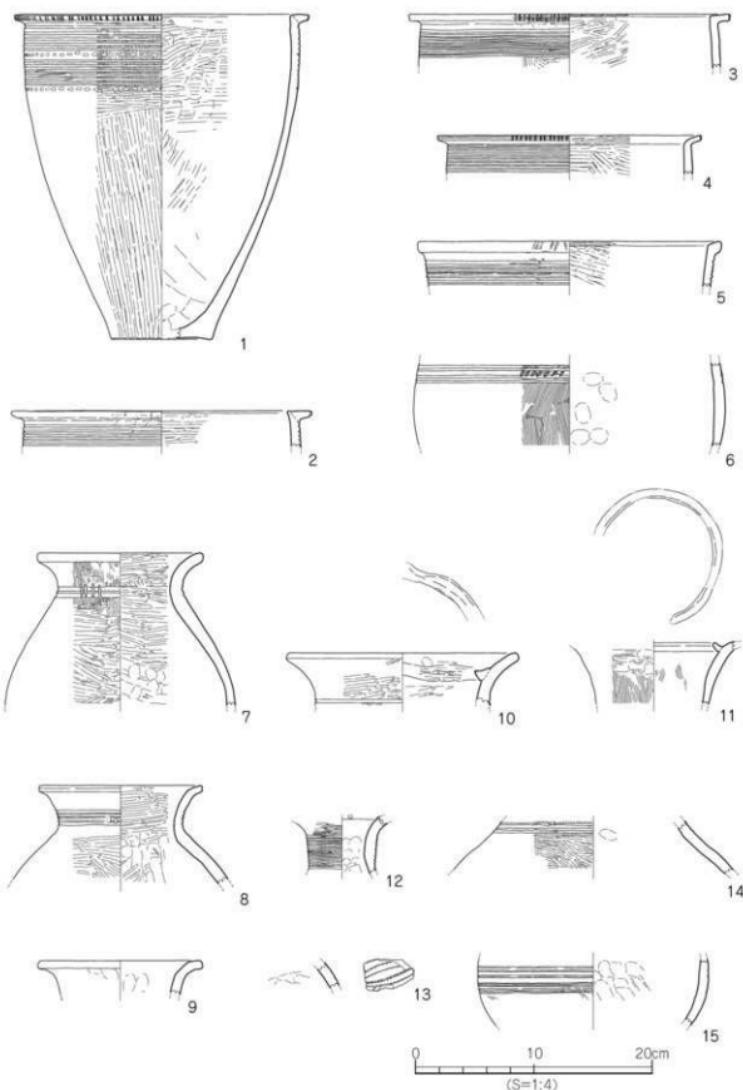
遺構以外には、包含層掘削時や重機による表土掘削時に遺物が出土した。なお、重機掘削時の出土品は層位や地点が不明であるため、ここでは地点不明遺物として取り扱う。

#### （1）包含層出土遺物（第19・20図、図版10）

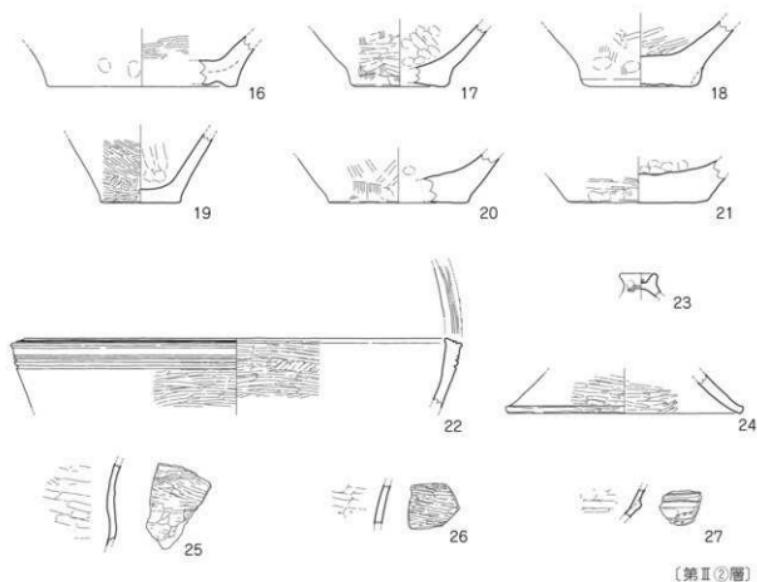
##### 第III②層出土遺物

1～24は弥生土器、25～27は縄文土器である。1～6は壺形土器。口縁部の成形は1・2が貼付、3～5は折曲による。1は胴部にヘラ描き沈線文5条と6条を施し、沈線文間に刺突列点文を加える。口縁端部には刻目を施し、底部はわずかに上げ底をなす。2は胴部にヘラ描き沈線文5条、口縁端部に刻目を施す。3は胴部にヘラ描き沈線文9条、4は櫛状工具による沈線文8条を施す。5は小片で、胴部にヘラ描き沈線文6条を施す。6は胴部片で、ヘラ描き沈線文4条以上と沈線文間に刻目を施す。なお、1・5は口縁部内面にヘラミガキ、1は胴上半部にヨコ方向、胴下半部にタテ方向のヘラミガキを施す。

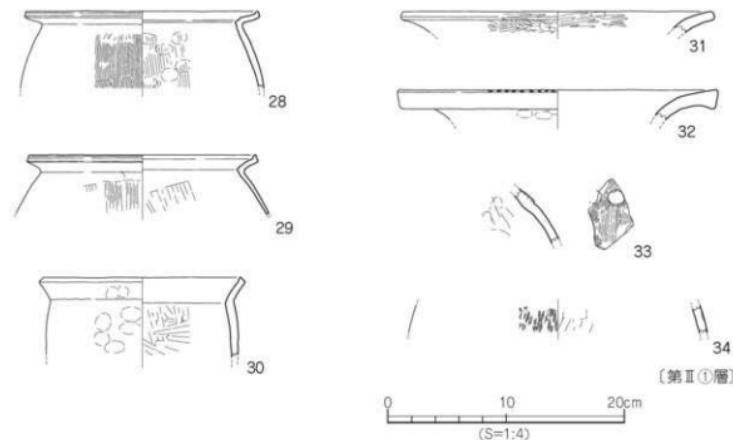
7～10は広口壺。口縁部は短く外反し、端部は丸い。7は頭部にヘラ描き沈線文2条と刻目、8はヘラ描き沈線文4条と2ヶ所に刻目2個以上を施す。10は頭部外面にヘラ描き沈線文2条以上を施し、内面に断面三角形状の凸帯1条を貼り付け、凸帯上に押圧と刻目を施す。11・12は長頭壺。11は、頭部内面に断面三角形状の凸帯1条を貼り付ける。12は頭部外面にヘラ描き沈線文10～11条を施し、内面凸帯には径4mm大の円孔を穿つ。13・14は肩部小片。13は貝殻施文による木葉文がみられ、14はヘラ描き沈線文3条を施す。15は胴部小片で、ヘラ描き沈線文7条以上を施す。16～21は底部。16はわずかに上げ底、17・18は突出するわずかに上げ底で、17は内面に粘土接合痕がみられる。19～21は平底である。22は口径35cm以上を測る鉢形土器の大型品で、口縁部は内湾気味に立ち上がり



第19図 第II②層出土遺物実測図

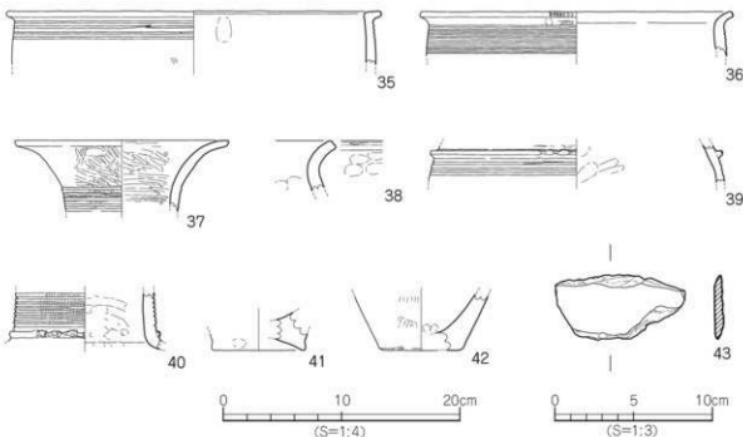


〔第II(2)層〕



〔第II(1)層〕

第20図 第II(1)層・II(2)層出土遺物実測図



第21図 地点不明出土遺物実測図

口縁端部は拡張され、端面にヘラ描き沈線文2条を施す。口縁部外面には、ヘラ描き沈線文3条を施す。23・24は蓋形土器。23はつまみ部で、中央部は凹む。24は口縁部が外反し、端部は外方向へ開く。内外面共に、ヨコ方向のヘラミガキを施す。1～24は弥生時代前期末～中期初頭。

25・26は深鉢、27は浅鉢の破片で、27の外面には、二枚貝の痕跡がみられる。25～27は縄文時代晚期。

### 第Ⅲ①層出土遺物

28～34は弥生土器である。28～30は壺形土器の口縁部。28・29は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部を上方に肥厚し、口縁端面に凹線文1条を施す。30は口縁部が外反し、口縁端部を上方に拡張する。31～33は壺形土器。31・32は広口壺で口縁部は外反し、31は口縁端部を丸く仕上げる。32は口縁端部が面をなし、口縁端面に刻目を施す。33は胴部小片で、径1.4cm大の円形浮文を貼り付ける。34は壺形土器の胴部小片で、刺突列点文2段を施す。28～34は弥生時代中期中葉～後半。

### (2) 地点不明出土遺物 (第21図、図版10)

35～42は弥生土器である。35・36は壺形土器。折曲口縁で、35は胴部にヘラ描き沈線文4条以上を施す。36は口縁端面に刻目と、胴部にヘラ描き沈線文8条以上を施す。37～40は壺形土器。37は広口壺の口頭部で口縁部は外反し、口縁端部は丸い。頭部にヘラ描き沈線文5条を施す。38は大型品で口縁部は外反し、口縁端部は丸く、口縁端面にヘラ描き沈線文1条を施す。39は胴部小片で、凸帶1条を貼り付け、凸带上に押圧を加える。40は長頭壺。頭部にヘラ描き沈線文7条以上と押圧凸帶を貼り付け、凸带上に刻目を施す。35～40は弥生時代前期末～中期初頭。

41・42は壺形土器の底部。41は上げ底、42は平底である。弥生時代中期後半。43は剥片で、石材はサスカイトである。長さ4.1cm、幅8.2cm、厚さ0.6cm、重さ27.7gを測る。

## 第4節 小 結

今回の調査では柱穴 7 基を検出し、遺物は包含層中から縄文時代晚期から弥生時代中期後葉の土器が出土した。柱穴は時期決定しうる遺物の出土はないが、埋土が弥生時代中期の土器を含む包含層と酷似していることや検出層位から、弥生時代中期以前の遺構と思われる。また、第Ⅲ層中からは、弥生時代前期末と中期後半に時期比定される遺物が層位的に検出された。残念ながら、来往廃寺跡や回廊状遺構、久米官衙遺跡に関する遺構や遺物は確認できなかったが、今後は南久米斎院地区に展開する弥生時代集落の広がりや様相を解明していく必要があろう。

### 遺構・遺物観察表 - 凡例 -

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載について。

法量欄 ( ) : 復元推定値

調整欄 土器の各部位名称を略記した。

例) 口→口縁部、口端→口縁端部、頸→頸部、胴→胴部、胴上→胴上半部、  
胴下→胴下半部。

胎土・焼成欄 胎土欄では混和剤を略記した。

例) 石→石英、長→長石、金→金ウンモ。

( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例) 石・長 (1~4) →「1~4 mm 大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。○→良好、○→良、△→不良。

表 16 柱穴一覧

柱穴 (S.P)	地 区	平面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	出土遺物	備 考
1	B3	円形	0.47 × 0.43 × 0.15	黒色土		
2	B3	円形	0.53 × 0.48 × 0.45	黒色土	弥生	
3	B2・3	円形	0.79 × 0.73 × 0.50	黒色土	弥生	柱痕有
4	B3	楕円形	0.91 × 0.88 × 0.47	黒色土		柱痕有
5	B3	楕円形	0.38 × 0.27 × 0.42	黒色土		
6	C2	円形	0.43 × 0.35 × 0.22	黒色土	弥生	
7	A・B3	(円形)	(0.12) × 0.26 × 0.12	黒色土		

## 遺物観察表

表 17 第Ⅲ(2)層出土遺物観察表 土製品

(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調 整		色調 (外面) 内面	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1 瓢	口径 (24.8) 底径 27.4 底深 8.4	張口縁。上げ底。口縁端部に刻目。 網部にヘラ書き沈綴文5条、刺突列 点文2条、沈綴文6条を施す。	⑥(ハケ6~8本/cm) ⑦(ヘラミガキ)	⑧(ナラ→ココナラ) ⑨(ナデ→ミガキ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	10	
2 瓢	口径 (25.2) 残高 3.0	貼口縁。口縁端部に刻目。網上部 にヘラ書き沈綴文5条を施す。	ヨコナデ	⑩(ヨコナデ) ⑪(ミガキ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)	黒斑		
3 瓢	口径 (27.1) 残高 4.5	張口縁。網部に沈綴文1条と 刻目。網部にヘラ書き沈綴文9条を 施す。	⑫(ヨコナデ) ⑬(ヨコナデ・ミガキ)	⑭(ヨコナデ→ミガキ) ⑮(ミガキ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)	○	10	
4 瓢	口径 (22.4) 残高 3.2	折曲口縁。口縁端部に沈綴文1条と 刻目。網部に北綴文8条を施す。	⑯(ヨコナデ) ⑰(ヨコナデ・ミガキ)	⑱(ミガキ)	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1~2) 赤色土粒○		10	
5 瓢	口径 (25.2) 残高 3.8	折曲口縁。口縁端部に刻目。網部に ヘラ書き沈綴文6条を施す。	⑲(ヨコナデ) ⑳(ヨコナデ)	㉑(ミガキ) ㉒(ヨコナデ→ミガキ)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)	○		
6 瓢	残高 7.0	網部にヘラ書き沈綴文4条以上と刻 目を施す。小片。	ハケ (7本/cm)	ナデ	灰茶色 淡灰茶色	石・長(1~3) 赤色土粒○	壊付着		
7 茶	口径 (13.6) 残高 12.8	広口盞。頭部にヘラ書き沈綴文2条 と刻目文を施す。	㉓(ヨコナデ→ミガキ) ㉔(ハラミガキ→8.5cm)	㉕(ナデ→ミガキ)	黑褐色 黑褐色	石・長(1~2)金 ○		10	
8 茶	口径 (13.5) 残高 8.3	広口盞。頭部にヘラ書き沈綴文4条 と2ヶ所に刻目2個以上を施す。	㉖(ヨコナデ) ㉗(ヨコナデ・ミガキ) ㉘(ミガキ)	㉙(ヨコナデ) ㉚(ミガキ) ㉛(ナデ・ミガキ) ㉜(ミガキ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~3) ○			
9 茶	口径 (13.4) 残高 2.9	広口盞。口縁部は外反し、端部は丸 い。	マメツ(ナデ)	ナデ ヨコナデ	淡黄灰色 淡黄灰色	石・長(1~2)金 ○			
10 茶	口径 (19.1) 残高 4.5	広口盞。外縁にヘラ書き沈綴文2条 以上を施し、内面に無地の角形状の2ヶ 所に貼り付け。口縁上に刻目を施す。	㉖(ヨコナデ→ミガキ) ㉗(ナデ)	㉘(ミガキ)	淡白黄色 淡黄褐色	石・長(1~3)	黒斑		
11 茶	残高 5.3	長頸甌。頭部内面に断面三角形状の 凸部を貼り付ける。	ヨコナデ・ナデ ハケ (7本/cm)	ヨコナデ ナデ(一部ハケ)	淡灰茶色 淡茶色	石・長(1~3) 赤色土粒○		10	
12 茶	残高 4.8	長頸甌。外面にヘラ書き沈綴文10 条以上を施し、内面は凸部上から 径4mmの円孔を空つ。	ハラミガキ ハケ (8本/cm)	ナデ(工具類)	茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~3)金 ○			
13 茶	残高 2.2	肩部小片。貝殻文(木葉文)を施す。ナデ	ミガキ→ナデ	ミガキ	棕茶色 棕茶色	石・長(1~2)	○	10	
14 茶	残高 4.5	肩部小片。ヘラ書き沈綴文3条を施 す。	ハケ (6本/cm) ミガキ	ナデ(マメツ)	褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金 ○			
15 茶	残高 5.5	肩部小片。ヘラ書き沈綴文7条以上 を施す。	マメツ	ナデ(マメツ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1~2)金 ○			
16 茶	底径 (15.7) 残高 4.2	上げ底。	ナデ	ミガキ	灰茶色 淡黄茶色	石・長(1~4)			
17 茶	底径 7.6 残高 5.2	突出する上げ底。内面に粘土接合痕 があられる。	ハケ→ミガキ ナデ	ナデ	淡黄色 灰黑色	石・長(1~3)	○		
18 茶	底径 (9.4) 残高 5.5	突出する上げ底。	ミガキ ナデ・ハケ	マメツ ミガキ	乳茶色 乳茶色	石(1~5)金 ○			
19 茶	底径 (6.5) 残高 5.8	平底。	ミガキ→ナデ酒し ミガキ	ナデ	褐黄色 淡褐色	石・長(1~3)金 ○			
20 茶	底径 (11.2) 残高 4.1	平底。	ハケ→ミガキ (マメツ)	ナデ(マメツ)	淡黄灰色 淡黄褐色	石・長(1~2)			
21 茶	底径 (11.8) 残高 3.6	平底。	ミガキ(マメツ) ナデ・ハラ(マメツ)	ナデ(マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1~2)金 ○			
22 瓢	口径 (35.2) 残高 5.9	口縁部は内側溝底に立ち上がり、端部は 網張りし、前面にヘラ書き沈綴文2条を施 す。口縁部外側に沈綴文3条を施す。	ヨコナデ ミガキ	㉓(ミガキ) ㉔(ヨコナデ→ミガキ)	褐色 褐色	石・長(1~2)			
23 盖	外径 (28) 残高 2.0	つまみ部分。中央部が凹む。	ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	淡茶褐色 黑褐色	石・長(1)赤色土粒 ○			
24 盖	口径 (19.4) 残高 3.3	口縁部は外反し、端部は外方向へ開 く。	ナデ→ミガキ ミガキ→ヨコナデ	ミガキ	淡灰褐色 淡黄褐色	石・長(1)金 ○			

## 南久米斎院遺跡 1次調査

表17 第Ⅲ②層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
25	深鉢	残高 6.9	縁部小片。	ナデ	ミガキ ケズリ	暗茶褐色 暗灰褐色	石・長(1~2) ○	黒斑	10
26	深鉢	残高 3.4	縁部小片。	条痕→ナデ	板ナデ ナデ	灰褐色 黑色	石・黄(1~2)金 角閃石○		10
27	浅鉢	残高 2.4	縁部小片。二枚具の痕跡有り。	ナデケズリ	ナデ	灰褐色 暗灰茶褐色	石・長(1~2)金 ○		10

表18 第Ⅲ①層出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
28	甕	口径(19.4) 残高 6.5	「く」の字状口縁。縁部は上方に肥厚し、凹線文1条を施す。	ヨコナデ ④ハケ(0本/cm)	ヨコナデ ④ハケ(0本/cm)→ナデ	赤茶色 赤茶色	石・長(1~2) ○	保有者 黒斑	10
29	甕	口径(19.0) 残高 5.0	「く」の字状口縁。縁部は上方に肥厚し、凹線文1条を施す。	ヨコナデ ④ハケ	ヨコナデ ④ハケ	橙褐色 橙褐色	長(1) ○		
30	甕	口径(16.6) 残高 7.7	口縁部は外反し、縁部は面をなす。	ヨコナデ・ナデ ④ナデ	ヨコナデ ④ナデ→テグ	淡灰茶色 淡茶色	石・長(1~3) ○	黒斑	
31	甕	口径(26.0) 残高 18.5	広口甕。口縁部は外反し、縁部は丸い。	ナデ→ミガキ	ナデ・ミガキ	橙褐色 淡橙褐色	石・長(1~2)金 ○		
32	甕	口径(26.6) 残高 25	広口甕。口縁部は外反し、縁部は面をなす。口縁上端面に划目を施す。	ヨコナデ ナデ(ややマツ)	ヨコナデ	灰茶色 灰茶色	石・長(1~5) ○	黒斑	
33	甕	残高 4.6	縁部に径14cm大の円形浮文1ヶ所を貼付す。	ハケ(7~10本/cm)	ナデ	乳褐色 淡茶色	石・長(1)金 ○		10
34	甕	残高 2.3	ハケ状工具による剥剝列点文2段半を施す。	ハケ→ナデ	板ナデ・ナデ	灰茶色 暗茶色	石・長(1) ○		

表19 地点不明出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		(外面) 色調 (内面)	胎 土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
35	甕	口径(31.6) 残高 4.5	折曲口縁。縁部にヘラ描き沈線文4条以上を施す。	ナデ・ヨコナデ ④ナデ・ハケ	ナデ	乳褐色 淡橙褐色	石・長(1~2)金 ○		
36	甕	口径(25.9) 残高 3.7	折曲口縁。口縁端部に划目を施す。縁部にヘラ描き沈線文8条以上を施す。	ハケ(7本/cm)	ナデ	淡乳黃色 橙褐色	石・長(1~3) ○		
37	甕	口径(18.0) 残高 5.9	広口甕。縁部にヘラ描き沈線文5条を施す。	ヨコナデ・ナデ ④ハケ	ヨコナデ ④ハケ→ミガキ	淡黃褐色 淡黃褐色	石・長(1~2)金 ○		
38	甕	残高 4.2	大型窓の口縁部。口縁端面にヘラ描き沈線文1条を施す。	ヨコナデ ナデ	ナデ	淡灰茶色 暗茶色	石・長(1~2)金 ○	黒斑	
39	甕	残高 3.1	凸帶1条と沈線文3条を施す。小片。	ヨコナデ(ミガキ) ヨコナデ(マツ)	ナデ	乳茶褐色 黑色	石・長(1~2) ○	黒斑	
40	甕	残高 4.8	縁部にヘラ描き沈線文7条以上と凸帶筋。凸帶筋→5本/cm。付け後、押工(工具によるキザミ)を施す。	ヨコナデ(マツ)	ヨコナデ(ミガキ) ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2)金 ○		10
41	甕	底径(7.5) 残高 3.2	上げ底。	ナデ	ナデ	橙褐色 茶褐色	石・長(1~2) ○		
42	甕	底径(7.0) 残高 4.7	平底。	ハケ(マツ)	ナデ(マツ)	橙褐色 暗黑色	石・長(1~2)金 ○		

表20 地点不明出土遺物観察表 石製品

番号	器種	残存	材質	法 量				備 考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
43	剥 片	ほぼ完形	サヌカイト	4.1	8.2	0.6	27.7		10

## 第4章 南久米斎院遺跡2次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 1. 調査に至る経緯（第22・23図）

1993(平成5)年12月4日、松山市南久米町631番1内における宅地開発に伴う埋蔵文化財確認願が、申請者より松山市教育委員会文化教育課（現文化財課・以下、文化教育課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「No.127 久米官衙遺跡群（旧来住廃寺跡）」内にあり、周知の遺跡として知られている。同包蔵地内では来住廃寺跡、久米高畠遺跡、来住町遺跡、南久米斎院遺跡などの発掘調査が行われ、弥生時代から中世にかけての集落関連遺構が確認されている。

これらのことから、文化教育課は確認願が申請された地番について遺跡の有無と、さらにはその範囲や性格を確認するために、平成5年12月20日に試掘調査を実施した。その結果、弥生時代の遺構・遺物を検出し、遺跡が確認された。このため申請者と文化財課・財團法人松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター（現 公益財團法人松山市文化・スポーツ振興財團埋蔵文化財センター、以下埋蔵文化財センター）の三者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、宅地開発により消失する遺跡に対して記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

発掘調査は国庫補助を受けて埋蔵文化財センターが主体となり、1994(平成6)年6月20日から同年7月22日の間に実施した。



第22図 調査地位置図

## 2. 調査の経緯

調査工程を、以下に略記する。

1994（平成6）年

- 6月20日 重機による掘削・土砂搬出作業を開始する。調査区壁面の土層精査作業や遺構検出作業・平面精査を順次行う。
- 23日 重機による掘削・土砂搬出作業を終了する。
- 23日 調査区壁面の土層図作成作業を開始する。
- 24日 遺構検出を終了し、遺構検出状況の写真撮影を行う。
- 27日 グリッド割の杭打ち作業を行う。遺構配置図を作成し遺構の掘り下げを開始する。
- 7月 4日 各遺構の遺物出土状況・土層堆積状況の写真撮影を行う。
- 7日 遺構平面図の作成を行う。
- 19日 遺構土層図の作成を終了し、遺構の掘り下げを完了する。
- 20日 遺構の測量作業を終了する。
- 22日 高所作業車による遺構完掘状況の写真撮影を行い、現場作業を完了する。

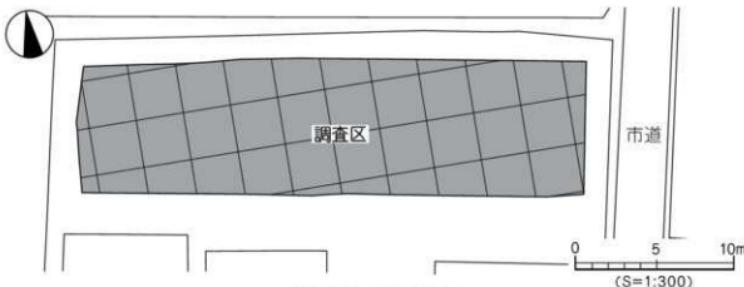
## 3. 調査組織（平成6年4月1日時点）

松山市教育委員会

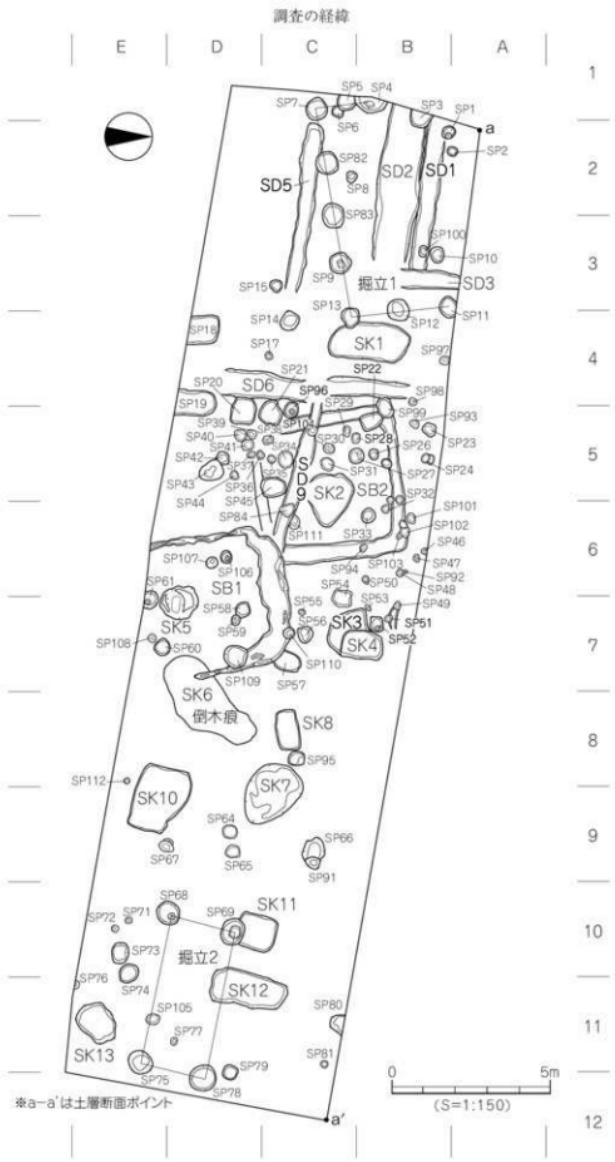
教 育 長	池田 尚郷
生涯教育部 部 長	渡辺 和彦
次 長	三好 俊彦
次 長	渡辺 泰輔
文化教育課 課 長	松平 泰定
課長補佐	中矢 正幸
係 長	家久 則雄

財團法人松山市生涯学習振興財團

理 事 長	田中 誠一
事 務 局 局 長	一色 正士
職業健センター 所 長	河口 雄三
次 長	田所 延行
調査係長	田城 武志（担当）
調 査 員	相原 浩二（担当）



第23図 調査区位置図



第24図 遺構配置図

## 第2節 層位

調査地は堀越川の南約100mに位置し、来往台地と呼ばれる標高40.40mに立地する。調査以前は造成地となっており、平地である。調査区の壇面土層は、場所によって大きな違いは見られない。よって北壁土層を図示し、層位をI～IV層に大別した（第25図、図版12）。基本層序の特徴は、以下の通りである。

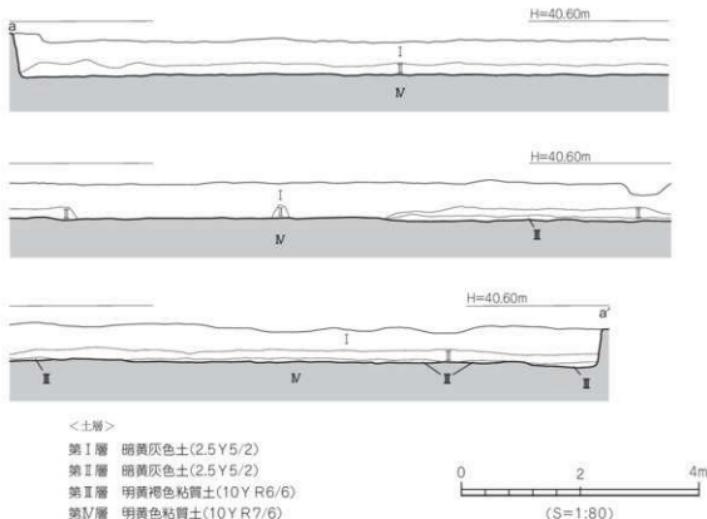
第I層：造成土（真砂土）

第II層：暗黄灰色土（2.5Y5/2）現代の水田耕作土

第III層：明黄褐色粘質土（10YR6/6）床土

第IV層：明黄色粘質土（10YR7/6）上面が遺構確認面

第I層は現代の造成土（真砂土）であり、層厚は38～58cmを測る。第II層は現代の水田耕土で調査区全域にみられ、層厚は10～20cmを測る。第III層は、第II層水田耕土の床土である。部分的に途切れしており、層厚は2～10cmを測る。第IV層は地山と呼ばれる層であり、湿ると粘性が強まる。現代の削平により、平坦面を形成している。遺物包含層は、削平のため失われている。遺構の検出は、第IV層上面で行った（第25図、図版12）。



第25図 北壁土層図

### 第3節 遺構と遺物

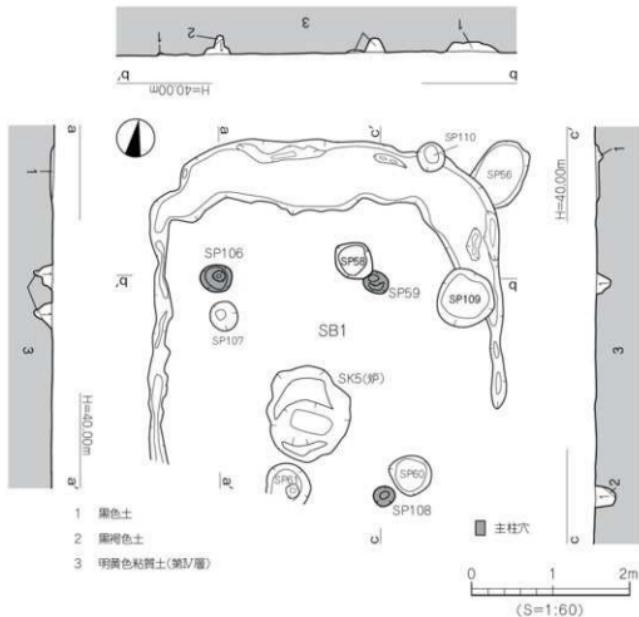
調査で検出した遺構は堅穴建物2棟、掘立柱建物2棟、溝6条、土坑11基、柱穴101基、倒木址1基である。遺物は弥生土器、須恵器が出土しているが、遺構からの出土遺物は少ない。出土遺物があつた主な遺構について、遺構毎に記す。

#### 1. 堅穴建物 (SB1)

##### SB1 (第26・27図、図版13・14)

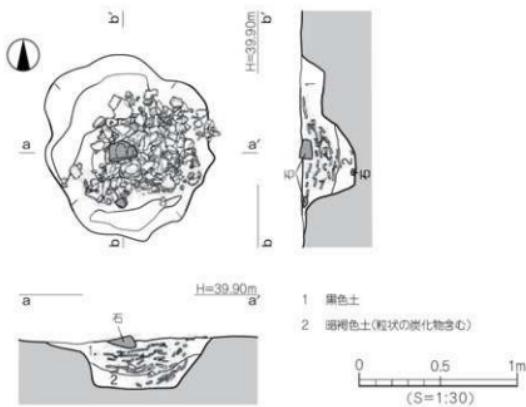
調査区中央部C6～E7区に位置する。建物南側は調査区外となるほか、削平が著しいため壁体が消失するなど全容は不明である。北西部はSB2と切合い、検出状況からSB2より後出するものと考えられる。平面形態は周壁溝の検出状況から隅丸方形を呈するものと考えられ、検出規模は東西4.50m、南北4.30m以上を測る。内部施設として周壁溝、主柱穴、炉と考えられる土坑(SK5)を検出した。

周壁溝は南東部が削平のため失われ、埋土は黒色土である。深さは同程度であるが、溝幅の広さに違いがあり、西側と東側に比べ、北側が3倍程度広い構造となっている。検出規模は西側と東側が幅

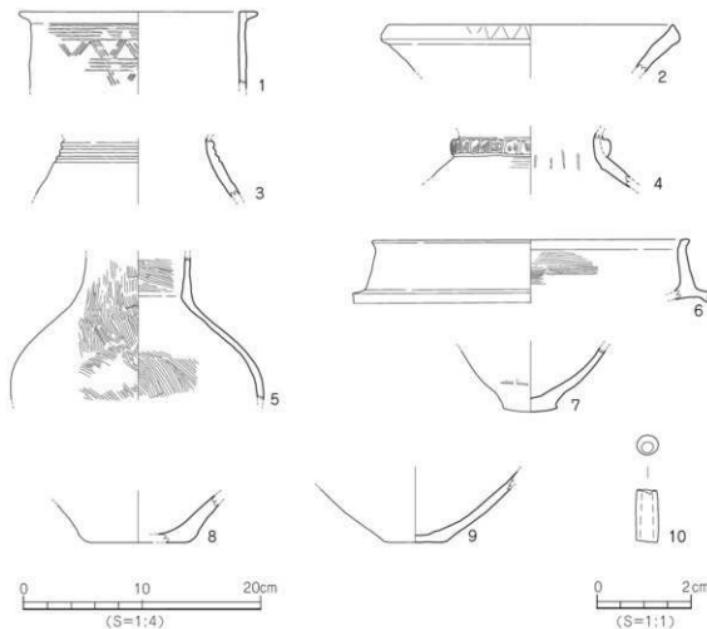


第26図 SB1測量図

南久米廬院遺跡 2 次調査



第27図 SB 1 炉跡 (SK 5) 測量図



第28図 SB 1 炉跡 (SK 5) 出土遺物実測図

15cm～28cm、北側は幅45cm～90cm、深さは4cm～9cmを測る。遺物は、管玉1点と土器の小片が出土した。

主柱穴はSP59、106、108の3基を検出した。平面形態は円形を呈し、埋土は黒色土を基調とするが、下部には黒褐色土が部分的にみられる。柱痕跡は検出していない。SP59は直径28cm、深さ16cm、SP106は直径38cm、深さ26cm、SP108は直径30cm、深さ25cmを測る。柱穴からは、土器の小片しか出土しなかった。

炉（SK5）は、建物内中央部のやや南寄りで検出した。平面形態は不整形を呈し、埋土は上層と下層の2層に分層できる。上層は黒色土、下層は粒状の炭化物を含む暗褐色土である。炉の壁面は、側面及び底面に熱を強く受けた形跡は見られない。検出規模は長軸1.14m、短軸1.10m、深さ0.14～0.30mを測る。遺物は上層・下層より弥生土器が出土したが、出土量は上層が多い。炉内からは甕形土器、壺形土器、高坏形土器が出土したが、高坏形土器は小片のため図示できるものがない。なお、図示できるものは、炉（SK5）と周壁溝から出土した遺物である。

#### 出土遺物（第28図、図版13・16）

1は甕形土器。胴部上半から口縁部にかけての破片。貼付口縁で、胴部上半に櫛描直線文と山形文を施す。2～6は壺形土器。2は口縁部片で、口縁端面に山形文を施す。3は頸部片で、ヘラ描直線文を施す。4は胴部上半から頸部にかけての破片で、頸部に押圧突帯文を施す。5は長頸壺。頸部は、直立して立ち上がる。6は複合口縁壺で、口縁接合部は断面「コ」字状を呈する。7～9は壺形土器の底部片で、7は突出する平底、8・9は平底である。10は碧玉製の管玉。

時 期：炉（SK5）から出土した複合口縁壺の特徴から、弥生時代後期後葉には埋没したものと考えられる。

#### S B 2（第29図、図版14）

調査区中央部、SB1の北側に位置する建物で、周壁溝と主柱穴だけの検出である。壁体は、現代の耕作土に削平され消失している。建物南東部はSB1に切られている。平面形態は、周壁溝の形状から隅丸方形を呈する。検出規模は、周壁の遺存状況より南北5.0m、東西4.7mを測る。

周壁溝の検出規模は幅40cm～50cm、深さ5cm～10cmを測る。埋土は、黒褐色土に地山である黄色土がブロック状に混入する。建物南側は周壁溝の埋土である黒褐色土がわずかに遺存しており、周壁溝は痕跡として認識できる程度であった。

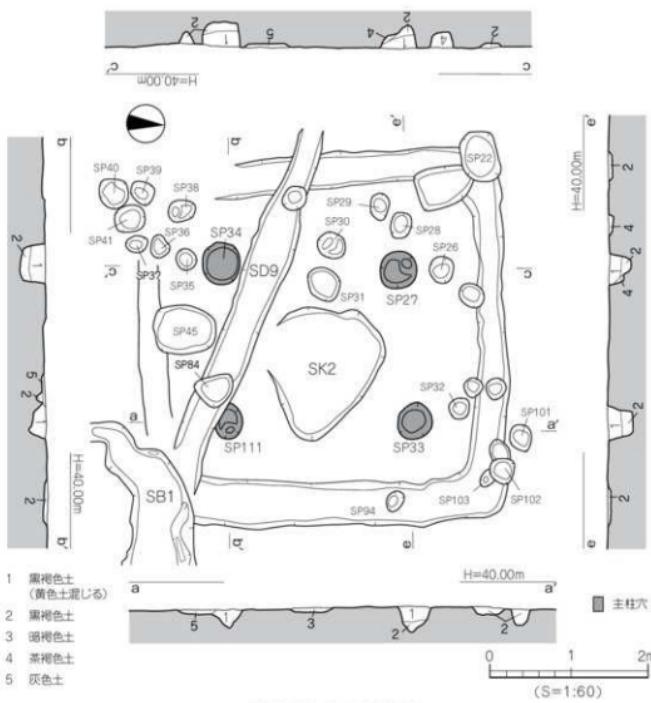
主柱穴はSP27・33・34・111の4基を検出した。いずれも平面形態は円形を呈するが、柱痕跡は検出していない。規模は直径40cm～50cm、深さ25cm～36cmを測る。遺物は周壁溝、柱穴共に出土していない。

時 期：出土遺物がないもののSB1と埋土が酷似することから、弥生時代後期後葉頃と考えられる。

## 2. 掘立柱建物（掘立）

#### 掘立1（第30図、図版14）

掘立1は、調査区西端に位置する8基の柱穴（SP4・7・9・11・12・13・82・83）で構成される東西4間、南北2間以上の掘立柱建物であり、建物北側は調査区外へと続くため全容は不明である。検出規模は、東西6.7m、南北3.1mを測る。検出した柱穴の平面形態は円形を呈し、規模は直径62cm



第29図 SB2 測量図

~98cm、深さ20cm~40cmを測る。柱間は1.40m~1.78mを測る。柱痕跡は検出しなかった。遺物はSP9とSP83より弥生土器や須恵器片が出土しているが、須恵器は小片のため図示できていない。

#### 出土遺物

11・12は弥生時代の甕形土器の底部片であるが、遺構の時期に直接関係する遺物ではない。

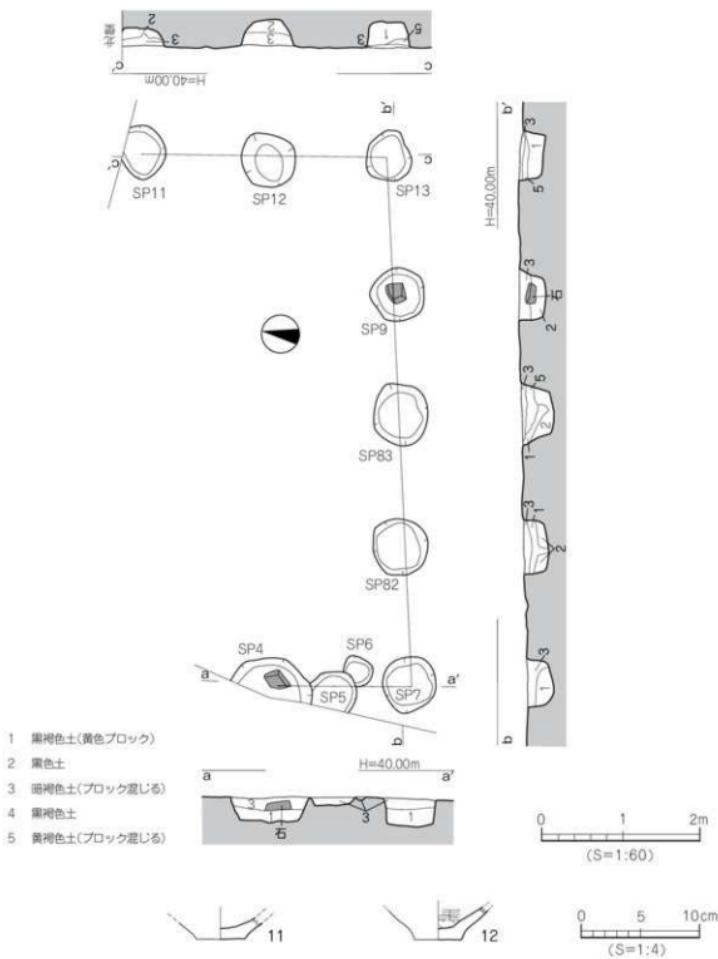
時 期：出土した須恵器小片は、古墳時代後期以降と考えられる。よって遺構の時期を同時代以降とする。

#### 掘立2（第31図、図版15）

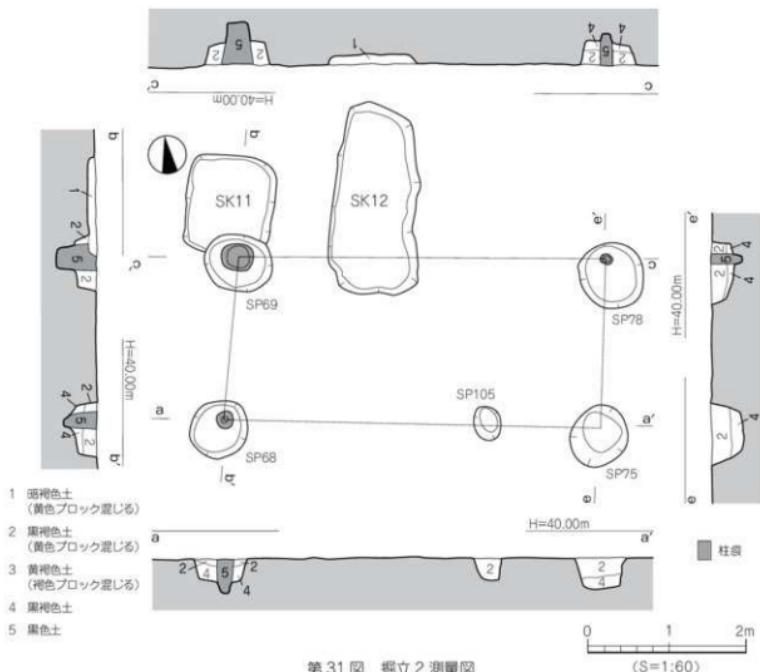
調査区東端に位置する4基の柱穴（SP68・69・75・78）で構成される東西1間、南北1間の掘立柱建物跡である。柱間は東西4.76m~4.90m、南北2.24mを測る。SP69はSK11に切られる。柱穴の平面形態は円形を呈し、検出時の柱穴埋土は掘立1と同じである。規模は直径60cm~80cm、深さ40cm~45cmを測る。柱痕は、SP68・69・78で確認した。柱痕幅は直径11cm~28cmを測る。遺物は

各柱穴埋土より須恵器細片が出土しているが、図示できるものはない。

時 期：柱穴埋土が掘立 1 と同様であり、須恵器が出土していることから、古墳時代後期以降と考えられる。



第 30 図 掘立 1 測量図・出土遺物実測図



第31図 掘立2測量図

### 3. 土坑 (SK)

#### SK 7 (第32図)

調査区東部C8～D9区に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出規模は長軸 2.12m、短軸 1.50m、深さ 0.32m～0.52m を測る。遺構埋土は黒色土であり、土坑基底面は西から東へ傾斜する。遺物は埋土上面にて、弥生土器が出土した。

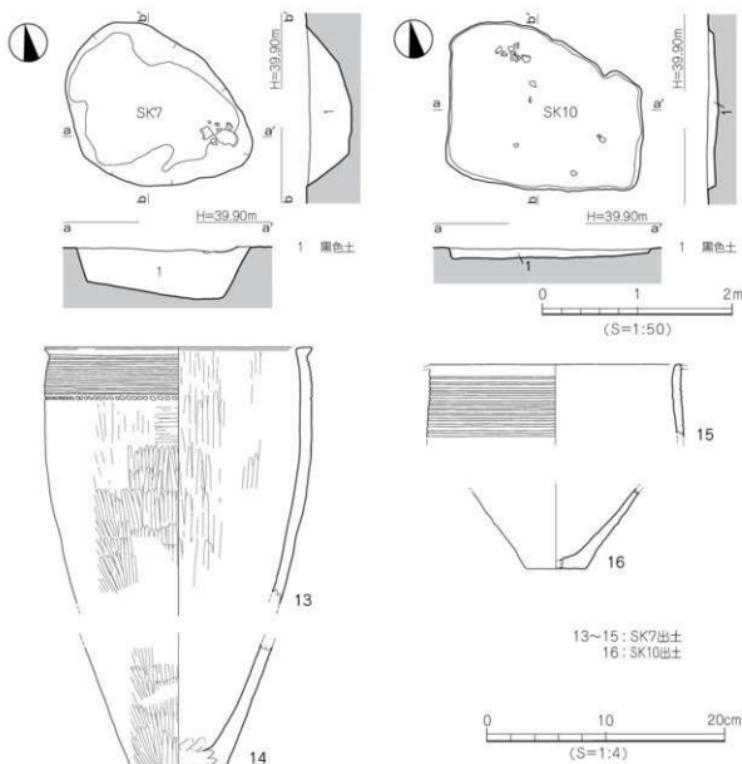
#### 出土遺物 (図版16)

13～15は壺形土器。13・14は同一個体と思われるが、復元時に接点がなかったため別番号とした。口縁部は貼付、底部は平底である。胴部上半には、ヘラ書き直線文と刺突文が施され、調整は内外面ともにヘラミガキが施される。15の胴部上半には、ヘラ書き直線文が施される。

時期：出土遺物より、弥生時代中期前半と考えられる。

#### SK 10 (第32図)

調査区南東部D8～E9区に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出規模は長軸 2.05m、短軸 1.68m、深さ 0.05m～0.12m を測る。土坑基底面はほぼ平坦である。遺構埋土は黒色土である。遺物は、弥



第32図 SK7・10測量図・出土遺物実測図

生土器が出土している。

#### 出土遺物

16は菱形土器の底部片で、平底である。

時 期：出土遺物より、弥生時代後期以降とする。

#### 4. 柱穴 (S P)

##### S P 105

調査区東部E11区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出規模は直径40cm、深さ28cmを測る。

柱痕は検出していない。柱穴埋土は、黒色土である。遺物は、弥生土器が出土している。

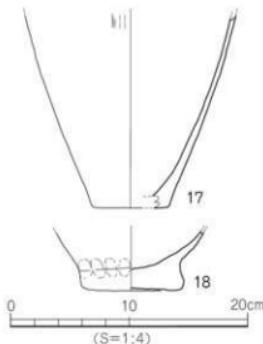
## 出土遺物（第33図、図版16）

17・18は壺形土器。17は磨滅のため器面が荒く全体の調整は不明であるが、外面にはミガキが看取される。18は突出部をもつ平底の底部である。

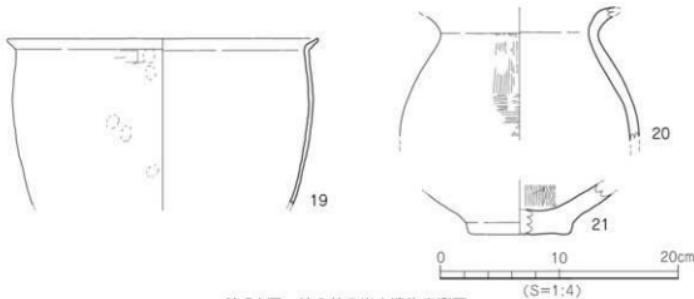
時 期：17は弥生中期前半、18は弥生後期と考えられる。よって、弥生時代後期以降とする。

## 5. その他の出土遺物（第34図、図版16）

19～21は遺構検出時に出土したものである。19はD8地区から出土した弥生中期前半の壺形土器、20は弥生後期の壺形土器、21は弥生後期の壺形土器の底部片である。



第33図 SP 105 出土遺物実測図



第34図 その他の出土遺物実測図

## 第4節 小結

今回の調査では現代の耕作土直下が遺構面であったため、削平により遺構の残りは悪かったものの、弥生時代中期前半の土坑1基、弥生時代後期と考えられる堅穴建物2棟、土坑1基、古墳時代後期以降と考えられる掘立柱建物跡2棟などを確認することができた。このうち、注目するに堅穴建物SB1の炉がある。炉の埋土中からは、廃棄された土器がまとまって出土している。この様な出土状況は住居廃絶時の儀礼行為を示していると考えられ、松山平野内の堅穴建物廃絶時の祭祀行為の一例として貴重な資料となるものであった。ただし、時期差のある遺物が出土している要因は今後の検討課題として残る。

そのほか、柱穴は100基余りを検出したが、掘立柱建物を復元できたものは2棟にとどまった。このうち掘立柱建物（掘立1）は官衙関連の掘立柱建物と主軸方位をほぼ同一としていることから、同時代の建物と考えられる。他の柱穴については、出土遺物が少なく明確に把握することができなかつた。柱穴の埋土は黒色土、暗褐色土、茶褐色土、黒褐色土、暗灰色土などがあり、土色の違いは時間的な幅を示すもので、弥生時代から中世にかけて断続的に小規模な建物が建てられたと考えられる。

## 遺構一覧

### 遺構一覧・遺物観察表 -凡例-

- (1) 以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。
- (2) 遺物観察表の各掲載について。
 

法量欄	( ) : 復元推定値
調整欄	土製品の各部位名称を略記した。 例) 口→口縁部、口端→口縁端部、肩→肩部、胴→胴部、胴上→胴部上位、 胴下→胴部下位、脚→脚部、底→底部。
胎土欄	胎土欄では混和剤を略記した。 例) 石→石英、長→長石、金→金ウニモ、赤→赤色土粒、密→精製土。
( ) の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。	
焼成欄	例) 石・長(1~3) → 「1~3mm 大の石英・長石を含む」である。 焼成欄の略記について。◎→良好、○→良。

表21 墓穴建物一覧

墓穴 (SB)	時期	平面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	床面積 (m <sup>2</sup> )	主柱穴 (本)	内部施設				備 考
							高床	土坑	炉	カマド	
1	弥生後期 後葉	隅丸方形	(周壁溝) 4.50 × (4.30) × 0.04 ~ 0.09	黒色土	(18.04)	(3)	—	—	○	—	一部調査区外
2	弥生後期 後葉	隅丸方形	(周壁溝) 5.00 × 4.70 × 0.05 ~ 0.10	黒褐色土	21.385	4	—	—	—	—	

表22 土坑一覧

土坑 (SK)	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)		埋 土	備 考		
				高床	土坑		炉	カマド	
1	B・C4	隅丸方形	逆台形	2.60 × 1.08 × 0.03		暗灰色土			孤立、HSPI3bに切られる
2	C5・6	不整形	逆台形	1.58 × 1.40 × 0.01 ~ 0.03		褐色土			SB2 内
3	B・C7	不整形	逆台形	1.40 × 1.20 × 0.05		褐色土			
4	B・C7	不整形	逆台形	1.30 × 0.90 × 0.06		褐色土・黒色土			
5	D6 ~ E7	不整形	逆台形	1.14 × 1.10 × 0.14 ~ 0.30		黒色土			SB1 卓
7	C8 ~ D9	不整形	舟底状	2.12 × 1.50 × 0.32 ~ 0.52		黒色土			
8	C8	隅丸方形	逆台形	1.26 × 0.70 × 0.02		暗褐色土			
10	D8 ~ E9	不整形	逆台形	2.05 × 1.68 × 0.05 ~ 0.12		黒色土			
11	C・D10	隅丸方形	逆台形	1.24 × 1.08 × 0.08		暗褐色土			孤立、2SP69に切る
12	C11 ~ D11	不整形	逆台形	2.28 × 1.04 × 0.09		暗褐色土・黒色土			
13	E11	不整形	舟底状	1.34 × 0.92 × 0.11		—			

表23 倒木址一覧

倒木	地 区	平面形	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)		埋 土	備 考		
				高床	土坑		炉	カマド	
1	D7・8	不整形	不明	3.40	×	1.60	×	不明	黒褐色土

## 南久米廬院遺跡 2 次調査

表 24 溝一覧

溝 (SD)	地 区	方 向	断面形	規 模 長さ×幅×深さ (m)	埋 土	備 考
1	B2・3	東→西	逆台形	(4.80) × 0.55 ~ 0.65 × 0.07	灰色土	SD3に切られる
2	B2・3	不明	逆台形	(5.00) × 1.20 ~ 1.35 × 0.11	灰色土	
3	A・B3	北→南	逆台形	(2.00) × 0.44 ~ 0.65 × 0.09	黒褐色土	SD1を切る一部調査区外
5	C2・3	東→西	皿状	(5.30) × 0.45 ~ 0.60 × 0.06	暗褐色土	
6	C・D4	北→南	台形	(6.00) × (0.50 ~ 0.59) × 0.04	灰色土	
9	C5・6	東→西	レンズ状	(5.02) × 0.35 ~ 0.55 × 0.03	灰褐色土	

表 25 掘立柱建物一覧

掘立	規 模 (間)	方 位	桁 行		梁 行		床面積 (m <sup>2</sup> )	備 考
			実長 (m)	柱間寸法 (m)	実長 (m)	柱間寸法 (m)		
1	4 × (2+α)	東西	6.70	1.68	(3.10+α)	(1.48)	(20.64)	
2	1 × 1	東西	4.76	4.76	2.24	2.24	10.66	

表 26 柱穴一覧

(1)

柱穴 (SP)	地 区	規 模 長径×短径×深さ (m)	平面形	断面形	埋 土	備 考
1	A・B2	0.42 × 0.39 × 0.30	円形	逆台形	黒色土	
2	A・B2	0.36 × 0.34 × 0.30	円形	逆台形	黒色土	
3	B1・2	0.64 × (0.48) × 0.23	(円形)	逆台形	黒色土 (黄色土混じる)	一部調査区外
4	B・C1	1.00 × (0.52) × 0.32	(円形)	逆台形	暗褐色土・黒褐色土 (黄色土混じる)	推立 1 一部調査区外
5	C1	0.63 × (0.50) × 0.07 ~ 0.13	梢円形	逆台形	暗褐色土	SP4に切られる 一部調査区外
6	C1	0.38 × (0.27) × 0.11	円形	逆台形	暗褐色土	SP5に切られる 一部調査区外
7	C1	0.75 × 0.69 × 0.26	円形	逆台形	暗褐色土 黒色土	掘立 1
8	C2	0.32 × 0.29 × 0.21	不整形	逆台形	黒褐色土	
9	C3	0.69 × 0.69 × 0.33	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	掘立 1
10	B3	0.50 × 0.40 × 0.20	円形	逆台形	黒土 (黄色土混じる)	
11	A3 ~ B4	0.70 × 0.60 × 0.30	円形	逆台形	黒土 (黄色土混じる)	掘立 1 一部調査区外
12	B3・4	0.74 × 0.67 × 0.33	円形	逆台形	黒褐色土	掘立 1 一部調査区外
13	B・C4	0.64 × 0.60 × 0.32	不整形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	掘立 1 一部調査区外
14	C4	0.70 × 0.68 × 0.25	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	
15	C3	0.40 × 0.40 × 0.04	不整形	逆台形	暗褐色土	
17	C4	0.20 × 0.18 × 0.07	円形	逆台形	暗灰色土	
18	D4	(1.11) × 0.83 × 0.04	円形	逆台形	暗灰色土	一部調査区外
19	D4・5	(1.30) × 0.75 × 0.03	隅丸方形	逆台形	暗灰色土	一部調査区外
20	D4・5	0.88 × 0.80 × 0.04	隅丸方形	逆台形	暗灰色土	
21	C4・5	0.84 × 0.80 × 0.10	円形	逆台形	暗灰色土	
22	B5	0.60 × 0.48 × 0.30	方形	逆台形	暗褐色土	SB2を切る SP99を切る
23	B5	0.48 × 0.42 × 0.17	不整形	逆台形	暗褐色土	

## 遺構一覧

(2)

柱穴 (SP)	地 区	規 模 長径×短径×深さ (m)	平 面 形	断面形	理 土	備 考
24	B5	0.40 × 0.30 × 0.34	半円形	台形	暗褐色土	一部調査区外
26	B5	0.30 × 0.24 × 0.20	不整形	台形	茶褐色土	
27	B・C5	0.42 × 0.40 × 0.19	円形	台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	SB2 主柱穴
28	B・C5	0.32 × 0.28 × 0.19	円形	台形	茶褐色土	
29	C5	0.32 × 0.20 × 0.11	橢円形	台形	茶褐色土	
30	C5	0.30 × 0.29 × 0.13	円形	台形	茶褐色土	
31	C5	0.42 × 0.36 × 0.10	円形	台形	茶褐色土	
32	B6	0.20 × 0.20 × 0.25	円形	台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	
33	B6	0.44 × 0.42 × 0.31	円形	台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	SB2 主柱穴
34	C5	0.50 × 0.50 × 0.08	円形	台形	暗褐色土	SB2 主柱穴
35	C5	0.26 × 0.26 × 0.15	円形	台形	黒褐色土	
36	C・D5	0.26 × 0.21 × 0.15	円形	台形	黒褐色土	
37	D5	0.28 × 0.20 × 0.13	橢円形	台形	黒褐色土	
38	C5	0.32 × 0.24 × 0.11	不整形	台形	黒褐色土	
39	D5	0.30 × 0.28 × 0.10	不整形	台形	黒褐色土	
40	D5	0.38 × 0.36 × 0.14	円形	台形	黒褐色土	
41	D5	0.38 × 0.34 × 0.08	円形	逆台形	黒褐色土	
42	D5	0.40 × 0.40 × 0.09	円形	逆台形	黒褐色土	
43	D5	0.72 × 0.58 × 0.24	不整形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)	
44	D5	0.30 × 0.22 × 0.17	不整形	逆台形	黒褐色土	
45	C5	0.78 × 0.58 × 0.20	隅丸長方形	不整形	黒褐色土	
46	B6	(0.20) × 0.18 × 0.13	円形	逆台形	暗褐色土	一部調査区外
47	B6	0.20 × 0.18 × 0.12	円形	逆台形	暗褐色土	
48	B6	0.20 × 0.18 × 0.13	円形	逆台形	黒褐色土	
49	B7	0.26 × 0.20 × 0.32	橢円形	逆台形	黒褐色土	
50	B6	0.26 × 0.22 × 0.14	円形	逆台形	暗褐色土	
51	B7	0.26 × 0.20 × 0.24	円形	逆台形	暗褐色土	
52	B7	0.44 × 0.40 × 0.28	方形	逆台形	暗褐色土	
53	B7	0.18 × 0.12 × 0.06	長方形	逆台形	茶褐色土	
54	C6・7	0.38 × 0.46 × 0.03	方形	逆台形	茶褐色土	
55	C7	0.20 × 0.14 × 0.14	不整形	逆台形	黒褐色土	
56	C7	0.50 × 0.44 × 0.24	不整形	逆台形	暗褐色土	
57	C7	(0.72) × 0.62 × 0.04	円形	逆台形	黒褐色土	SBI を切る
58	D7	0.50 × 0.40 × 0.17	不整形	逆台形	黑色土	SBI を切る
59	D7	0.30 × 0.28 × 0.16	円形	逆台形	黑色土	SBI 主柱穴
60	D・E7	0.50 × 0.48 × 0.09	円形	逆台形	暗灰色土	
61	E6・7	(0.54) × 0.48 × 0.18	(円形)	逆台形	黑色土	一部調査区外

## 南久米廬院遺跡 2 次調査

(3)

柱穴一覧					
柱穴 (SP)	地 区	規 模 長径×短径×深さ (m)	平 面 形	断面形	埋 土
64	D9	0.38 × 0.36 × 0.18	円形	舟底状	黒褐色土 (黄色土混じる)
65	D9	0.42 × 0.38 × 0.08	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)
66	C9	(0.60) × 0.60 × 0.17	不整形	逆台形	暗褐色土 SP9 に切られる
67	D・E9	0.44 × 0.36 × 0.15	不整形	逆台形	暗褐色土 (黄色土混じる)
68	D・E10	0.69 × 0.66 × 0.45	円形	逆台形	暗褐色土 (黄色土混じる) 掘立 2
69	D10	0.80 × 0.60 × 0.58	円形	逆台形	黒褐色土 掘立 2・SK11 に切られる
71	E10	0.20 × 0.19 × 0.10	円形	逆台形	暗褐色土
72	E10	0.20 × 0.19 × 0.07	円形	逆台形	黒褐色土
73	E10	0.60 × 0.52 × 0.09	隅丸方形	逆台形	黒褐色土
74	E10・11	0.60 × 0.55 × 0.10	円形	逆台形	暗褐色土
75	E11・12	0.72 × 0.65 × 0.39	円形	逆台形	暗褐色土 掘立 2
76	E・F11	(0.24) × 0.20 × 0.16	円形	逆台形	黒褐色土 一部調査区外
77	D11	0.30 × 0.20 × 0.14	円形	逆台形	黒褐色土
78	D11・12	0.80 × 0.72 × 0.31	円形	逆台形	黒褐色土 黄褐色土 掘立 2
79	D11・12	0.50 × 0.50 × 0.10	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)
80	C11	(0.60) × 0.45 × 0.08	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる) 一部調査区外
81	C11	0.28 × 0.20 × 0.25	円形	逆台形	黒褐色土 (黄色土混じる)
82	C2	0.75 × 0.70 × 0.32	円形	逆台形	暗褐色土外 掘立 1
83	C2・3	0.83 × 0.70 × 0.38 ~ 0.40	楕円形	逆台形	暗褐色土外 掘立 1
84	C6	0.50 × 0.38 × 0.03 ~ 0.12	不整形	舟底状	黒褐色土
91	C9	0.60 × 0.40 × 0.05 ~ 0.12	不整形	逆台形	暗褐色土 (黄色土混じる) SP66 を切る
92	B6	0.10 × 0.07 × 不明	不整形	不明	黒褐色土
93	B5	0.30 × 0.28 × 0.22	不整形	逆台形	暗褐色土
94	B6	0.31 × 0.21 × 0.15	不整形	逆台形	不明
95	C8	0.58 × 0.56 × 0.38	円形	舟底状	暗褐色土
96	C4・5	0.50 × 0.44 × 0.31	円形	台形	黒褐色土
97	B4	0.32 × 0.28 × 0.05	円形	逆台形	黒褐色土 一部調査区外
98	B4	0.30 × 0.28 × 0.04	円形	逆台形	暗褐色土
99	B4・5	0.65 × 0.50 × 0.24	楕円形	逆台形	暗褐色土 SP22 に切られる SB2 を切る
100	B3	0.28 × 0.22 × 0.23	円形	逆台形	黑色土
101	B6	0.34 × 0.30 × 0.16	円形	逆台形	黒褐色土
102	B6	0.30 × 0.30 × 0.19	円形	逆台形	黒褐色土 SB2 を切る
103	B6	0.20 × 0.14 × 0.05	円形	逆台形	茶褐色土
104	C5	0.28 × 0.27 × 0.28	円形	逆台形	暗褐色土
105	E11	0.42 × 0.38 × 0.28	楕円形	逆台形	黑色土
106	D6	0.38 × 0.38 × 0.08 ~ 0.26	円形	逆台形	黑色土 SB1 主柱穴
107	D6	0.40 × 0.36 × 0.09	楕円形	逆台形	黑色土

## 遺物観察表

柱穴一覧						
柱穴 (SP)	地区	規格 長径×短径×深さ (m)	平面形	断面形	埋土	備考
108	E7	0.30 × 0.30 × 0.25	円形	逆台形	黒色土	SB1 主柱穴
109	D7	0.70 × 0.70 × 0.10	円形	逆台形	黒色土	
110	C7	0.32 × 0.32 × 0.12	円形	逆台形	黒色土	
111	C6	0.39 × 0.32 × 0.18	楕円形	逆台形	黒褐色土	SP84・SD9に切られる SH2+柱穴
112	E8	0.20 × 0.18 × 0.18	円形	逆台形	黒褐色土	

表 27 SK5出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
1 瓢	口徑 (201)	口縁部は貼付口縁。外面に鶴彫直線文と山形文が施される。	ヨコナデ→施文 ナデ	にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○			16	
2 瓢	口徑 (240)	口縁端部は上下にやや肥厚する。口縁端部に山形文が施される。	ヨコナデ ヨコナデ→施文	橙色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○			16	
3 瓢	残高 51	腹部。外面にヘラ描沈線文が3条施される。	ミガキ→ナデ ヨコナデ	橙色 橙色	石・長 (1~4) ○			16	
4 瓢	残高 46	腹部には布目痕を残す押圧突文が施される。	ミガキ→ナデ ヨコナデ(工具痕)	橙色 褐灰色	石・長 (1~4) ○			16	
5 瓢	残高 121	腹部は直立して立ち上がる。	ハケ (7~8本/cm)	ハケ 7本 /cm 一部マツツ	明褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~5) 金 ○		16	
6 瓢	口徑 (267)	複合口縁器。接合部は無面「コ」字状を呈する。	ヨコナデ ヨコナデ ハケ各本 (cm)	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ○			16	
7 瓢	底径 46 残高 54	突出する平底の底部。	マメツ 一部ハケ	マメツ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (0.5~2) ○		16	
8 瓢	底径 (8.0)	平底の底部。	マメツ	マメツ	褐灰色	石・長 (1~3) ○		16	
9 瓢	底径 (4.6) 残高 6.0	平底の底部。	マメツ 一部ナデ	マメツ 一部ナデ	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~4) ○		16	

表 28 SK5出土遺物観察表 装身具

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径 (cm)	孔径 (cm)	高さ (cm)		
10	管玉	完形	碧玉	緑灰色	0.4~0.5	0.2	1.1	0.31	

表 29 握立1出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
11 瓢	底径 (4.0) 残高 1.8	平底の底部。	ハタリ	マメツ	にぶい黄褐色 灰褐色	石・長 (～3) ○			
12 瓢	底径 (4.0) 残高 2.8	やや突出する底部。	マメツ 一部ナデ	ハケ 1~5本 /cm ナデ	浅黄色 浅黄色	石・長 (1~5) ○			

表 30 SK7出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量 (cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
13 瓢	口徑 (225)	口縁部は貼り付け口縁。胴上半にヘラ描き直線文を施す。	ヨコナデ ヘラミガキ 直線文	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~2) ○			16	
14 瓢	底径 (8.3) 残高 10.0	平底の底部。	ヘラミガキ	ナデ(指頭痕)	にぶい黄褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ○		16	
15 瓢	口徑 (204)	口縁端部は欠損。胴上半にヘラ描き直線文を施す。	ナデ→施文	ナデ	灰褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~2) ○		16	

## 南久米廬院遺跡2次調査

表31 SK 10出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
16	甕	底径 (5.0) 残高 6.8	平底の底部。胴部は外上方に立ち上る。	マメツ	マメツ	褐色 にぶい褐色	石・長 (1~5) ○	黒斑	

表32 SP 105出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
17	甕	底径 (6.5) 残高 16.4	胴部は外上方に立ち上がる。	マメツ 一部ミガキ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長 (1~6) ○		16
18	甕	底径 8.0 残高 5.0	突出する平底の底部。	ハクリ (指頭痕)	マメツ	褐色 明褐色	石・長 (1~6) ○		16

表33 その他の出土遺物観察表 土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調 整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外 面	内 面				
19	甕	口径 (26.0) 残高 14.1	口縁部は短く上方に聞く。 (工具・指頭痕)	マメツ	マメツ	灰黄褐色 にぶい黄褐色	石・長 (1~3) ○		16
20	甕	残高 11.3	口縁部欠損。頭部はやや外反する。	ハケ(5本/cm) 一部マメツ	ナデ	褐色 にぶい橙色	石・長 (1~2) ○		16
21	甕	底径 (7.8) 残高 4.2	突出する平底の底部。	マメツ 一部ココナデ	ハケ(5本/cm) @ ナデ	灰黄褐色 にぶい黄橙色	石・長 (1~5) ○		16

## 第5章 調査の成果と課題

本書掲載の久米才歩行遺跡6次調査と南久米斎院遺跡1・2次調査では、縄文時代から近世までの遺構や遺物を確認した。ここでは、時代毎にまとめを行う。

### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構は未検出であるが、南久米斎院遺跡1次調査からは包含層中より晩期の遺物が出土した。来住台地上では、調査地西方にある久米高畠遺跡36次調査において晩期前葉の土器を伴った円形竪穴建物1棟が検出されているほか、同26次調査や35次調査でも同時期の土坑が検出されているが、検出事例は少ない。今回の結果は、来住台地東方城にも該期の集落が存在していることを示唆するものといえよう。

### 2. 弥生時代

久米才歩行遺跡6次調査と南久米斎院遺跡1次調査では、弥生時代前期から中期の遺構や遺物を検出した。とりわけ、南久米斎院遺跡1次調査では前期末と中期後半期の遺物が層位的に検出されたほか、2次調査からは中期前半の土坑1基が検出されている。また、南久米斎院遺跡2次調査からは弥生時代後期後葉の竪穴建物2棟(SB1・2)が検出され、SB1の炉内からは多量の土器や石が出土した。出土状況から、住居廃絶に伴う祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。

久米才歩行遺跡周辺では、2次調査と7次調査において前期末から中期初頭段階の竪穴建物が検出され、1次調査からは中期前葉から末段階の土器溜まりが検出されている。このように、久米才歩行遺跡一帯では、弥生時代前期末から中期にかけて比較的広い範囲に集落が営まれていたことが分かる。

### 3. 古墳時代

久米才歩行遺跡6次調査では、古墳時代中期後半期の竪穴建物1棟と後期前半期の掘立柱建物2棟を検出した。SB1は一辺約7.5m前後を測る方形建物で、4本柱構造である。一方、掘立柱建物は3間×2間または3間以上の建物で、建物方位を真北方向より東や西に振っている。なお、柱穴掘り方は円形を呈している。同遺跡周辺では、5次調査にて中期後半期の竪穴建物、2次調査からは後期前半期の竪穴建物がそれぞれ確認されている。また、1次調査からは6世紀代の掘立建物4棟が検出されており、久米才歩行遺跡一帯は古墳時代中期から後期にかけて大規模な集落が展開していたものといえる。一方、南久米斎院遺跡2次調査からは、古墳時代後期以降と考えられる掘立柱建物2棟が検出されている。このうち、掘立1は4間×2間以上の建物址で、柱穴内からは扁平な石が出土している。各柱穴掘り方は円形を呈し、建物方位を真北方向より東へ振っている。このことから、同遺跡周辺にも古墳時代後期の集落が存在するものと考えられる。

### 4. 古代

古代では、久米才歩行遺跡6次調査において飛鳥時代後半期の掘立柱建物1棟を検出した。2間×1間以上の総柱建物で、建物方位をほぼ真北方向にとる。柱穴掘り方内からは、完形の須恵器壺蓋と

口縁部と底部を欠損する須恵器壺が折り重なるような状態で出土した。出土状況から、何らかの祭祀儀礼が執り行われたものと推測される。遺跡周辺では3次調査や4次調査、7次調査にて7世紀代の掘立柱建物が検出されている。特に、3次調査からは、柱穴径1m前後を測る桁行長6.7m以上の比較的大型建物が報告されている。来住台地西方域における古代集落の存在は、これまでの調査により明らかになりつつあり、今回の調査結果は既往の調査成果を追従するものといえる。

## 5. 中近世

中世の遺構は、久米才歩行遺跡6次調査において土坑を検出した。2基の土坑が重複しており、平面形態や規模の確定は難しいが、SK1とする楕円形土坑の基底面付近からは完形の土師器壺が2点出土した。出土状況から土坑墓の可能性があり、時期は室町時代前半、13世紀代と想定される。

これまでの調査において調査地周辺では、数多くの中世遺跡が確認されている。久米才歩行遺跡3次調査地と4次調査地は隣接しており、両遺跡からは掘立柱建物3棟や井戸址、溝、土坑が検出され、これらは概ね室町時代後期、15～16世紀代の遺構と考えられている。また、同7次調査からは15世紀代の溝が確認されているほか、6次調査では包含層中より近世、江戸時代後期の陶磁器片（瀬戸美濃焼・青磁）が少量ではあるが出土している。

これらのことから、久米才歩行遺跡一帯には中世から近世段階の集落が存在しているものと考えられるが、その性格は定かではない。

今回報告の遺跡は来住台地東辺及び西辺にあり、今回の調査成果により台地周縁部の状況が明らかになってきた。とりわけ、久米官衙遺跡群や来住庵寺寺域周辺地の集落様相や景観を考える資料として、重要な遺跡である。弥生時代はもとより、来住台地上や周縁部における各時代の集落構造や変遷解明は今後の重要課題のひとつであり、それらの究明が急務となる。

## 写真図版

写真図版 1～6：久米才歩行遺跡 6次調査

写真図版 7～10：南久米斎院遺跡 1次調査

写真図版 11～16：南久米斎院遺跡 2次調査

## 写真図版データ

1. 遺構は、主な状況については、 $4 \times 5$  判や  $6 \times 7$  判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、 $35\text{mm}$  判フィルムカメラで補足している。一部の撮影にはやぐらを使用した。

使用機材：

カ メ ラ	トヨフィールド 45A	レ ン ズ	スーパーアンギュロン 90mm他
	アサヒペンタックス 67		ペンタックス 67 55mm他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール 28 ~ 85mm他
フ イ ル ム	白 黒 ネオパン SS・アクロス		

2. 遺物は、 $4 \times 5$  判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カ メ ラ	トヨビュ- 45G
レ ン ズ	ジンマー S 240mm F 5.6 他
ス ト ロ ボ	コメット /CA32・CB2400
ス た ン ド 等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド 101
フ イ ル ム	ネオパンアクロス

3. 単色図版は、一部を除き、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引 伸 機	ラッキー 450MD・90MS
レ ン ズ	エル・ニッコール 135mm F5.6A・50mm F2.8N
印 画 紙	イルフォードマルチグレードIV RC ペーパー

4. 製 版：写真図版 175 線

印 刷：オフセット印刷

用 紙：マットコート 76.5kg

【参考】『埋文写真研究』vol.1 ~ 20・『報告書制作ガイド』『文化財写真研究』vol.1.2

[大西 朋子]

久米才歩行遺跡 6次調査

図版  
1



1. 調査前全景（北東より）



2. 作業風景（南西より）

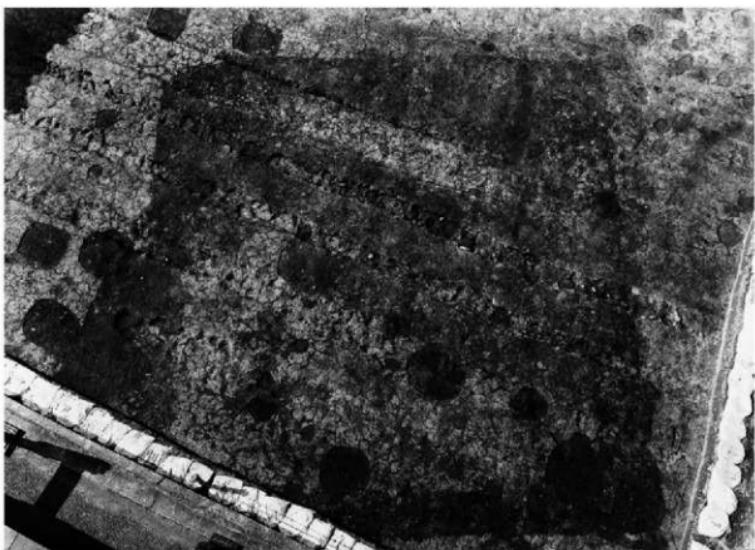
図  
版  
2



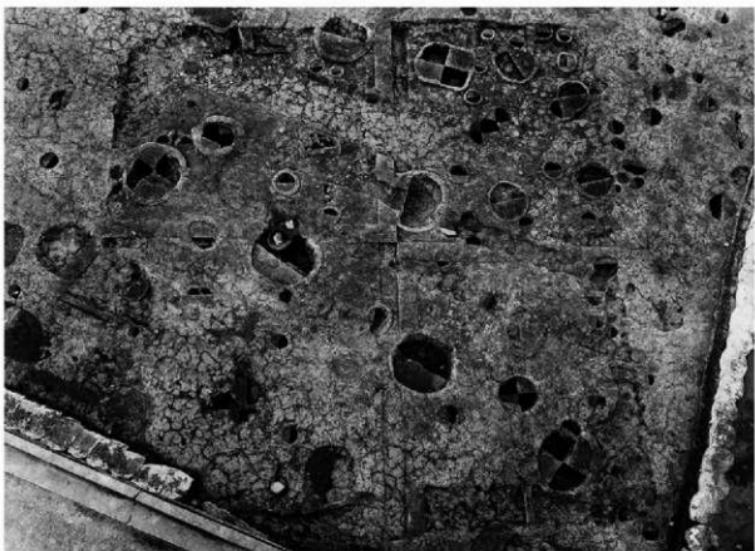
1. 遺構検出状況（東より）



2. 遺構完掘状況（東より）



1. SB1 検出状況（北東より）



2. SB1 実掘状況（北東より）

久米才歩行遺跡 6 次調査



1. SK1 遺物出土状況（東より）

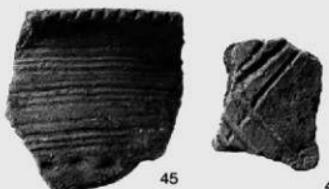
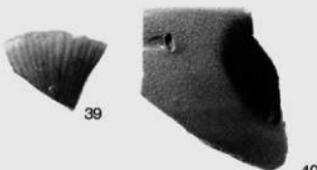
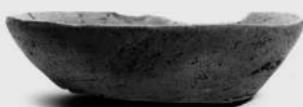


2. 掘立 3 [SP31] 遺物出土状況（北より）



1. SB1 出土遺物

図  
版  
6



1. 出土遺物〔掘立 1 : 17 ~ 21・23、掘立 3 : 31・32、SK1 : 35、第Ⅱ層 : 39・40、  
第Ⅲ層 : 43・44、地点不明 : 45・48〕



1. 調査前全景（南東より）



2. 作業風景（南西より）

図版 8



1. 遺構検出状況（北より）



2. 遺構完掘状況（東より）



1. 包含層遺物出土状況（1）（北より）



2. 包含層遺物出土状況（2）（東より）

図

版

10



1



7



3



4



13



11



25



26

27



28



33



40



43

1. 出土遺物〔第Ⅲ②層：1・3・4・7・11・13・25～27、第Ⅲ①層：28・33、地点不明：40・43〕



1. 調査区と周辺の状況（東より）



2. 遺構検出状況（東より）

図  
版  
12



1. 北壁土層（南より）



2. 作業状況（東より）



1. SB1 南北ベルト土層堆積状況（西より）



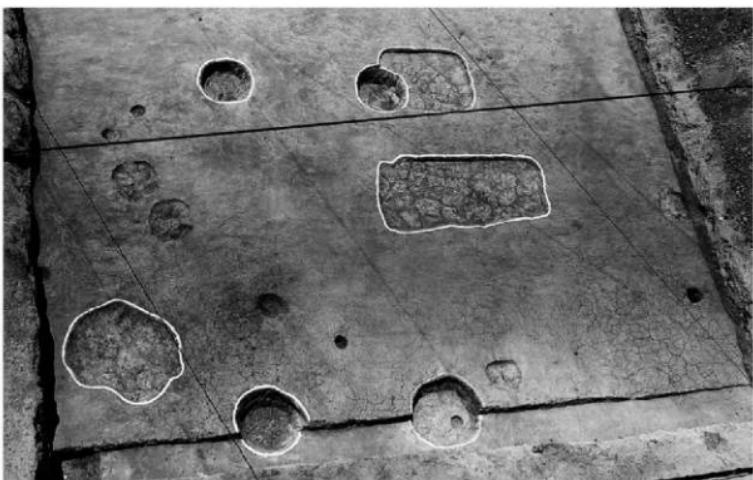
2. SB1 内 SK5 遺物出土状況（東より）



1. SB1・2 完掘状況（東より）



2. 掘立 1 柱穴完掘状況（南東より）

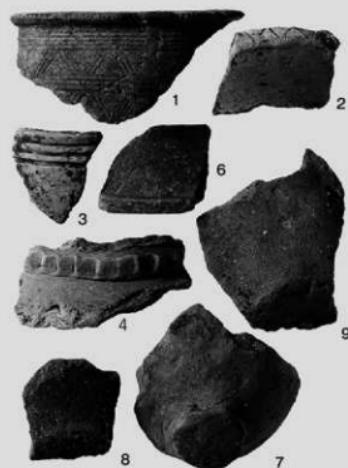


1. 挖立 2 完掘状況（東より）



2. 調査区完掘状況（東より）

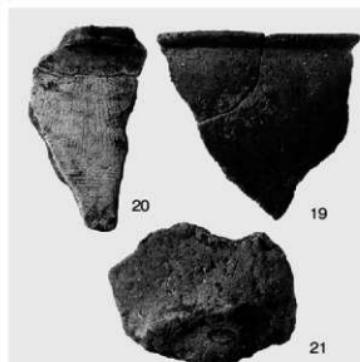
図  
版  
16



1. SK5 出土遺物 (1 ~ 9)



2. SK7 出土遺物 (13 ~ 15)



3. SP105 出土遺物 (17・18)  
その他の出土遺物 (19 ~ 21)

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	くめさいかちいせき	みなみくめさやいせき			
書名	久米才歩行遺跡 6 次調査・南久米斎院遺跡 1 次調査・南久米斎院遺跡 2 次調査				
副書名	国庫補助市内遺跡発掘調査報告書				
卷次					
シリーズ名	松山市文化財調査報告書				
シリーズ番号	第 163 集				
編著者名	相原 浩二・水本 完児・大西 朋子				
編集機関	公益財団法人松山市文化・スポーツ振興財団 埋蔵文化財センター				
所在地	〒 791 - 8032 愛媛県松山市南斎院町乙 67 番地 6 TEL 089 - 923 - 6363				
発行年月日	西暦 2013 (平成 25) 年 3 月 15 日				
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 北緯 東経 調査期間 面積 (m <sup>2</sup> ) 調査原因			
くめさいかちいせき 久米才歩行遺跡 6 次調査	まつやましまなみくめさ 松山市 南久米町 487 番 2	38201 33°48'40" 132°48'05" 19990920 + 20000131 286.82		宅地開発	
まつやましまなみくめさ 南久米斎院遺跡 1 次調査	まつやましまなみくめさ 松山市 南久米町 635 番 2, 635 番 4	38201 33°48'42" 132°48'18" 19900113 + 19900315 318.25		宅地開発	
まつやましまなみくめさ 南久米斎院遺跡 2 次調査	まつやましまなみくめさ 松山市 南久米町 631 番 1	38201 33°48'45" 132°48'17" 19940620 + 19940722 600.00		宅地開発	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久米才歩行遺跡 6 次調査	集落	古墳 古代 中世	堅穴・掘立 掘立 土坑	弥生土器・土師器・須恵器・石 弥生土器・土師器・須恵器 土師器	中世の土坑墓を検出
南久米斎院遺跡 1 次調査	集落	弥生	溝・柱穴	弥生土器・石器	弥生前期と中期の包含層を層位的に検出
南久米斎院遺跡 2 次調査	集落	弥生 古墳	堅穴・土坑・柱穴 掘立	弥生土器・管玉 弥生土器・土師器・須恵器	弥生後期の建物廢絶に伴う祭祀跡を検出
要約	<p>来住台地西縁に所在する久米才歩行遺跡 6 次調査では、古墳時代中期から後期の堅穴建物や掘立柱建物のほか飛鳥時代の建物や中世の土坑墓を検出した。一方、台地東縁にある南久米斎院遺跡 1 次調査では弥生時代前期や中期の包含層が層位的に検出されたほか、弥生期の柱穴や溝を検出した。同 2 次調査では弥生後期の堅穴建物が検出され、跡からは廃棄された土器がまとまって出土した。これは、出土状況より建物廢絶に伴う祭祀行為の一例となる貴重な資料である。</p> <p>今回の調査結果は、来住台地西縁の集落様相を解明するうえで、これまでの調査・研究成果を補足するものであり、来住台地上における集落構造や変遷を考えるうえで、貴重な成果といえよう。</p>				

松山市文化財調査報告書 第163集

## 久米才歩行遺跡6次調査 南久米斎院遺跡1次・2次調査

国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

---

平成25年3月15日 発行

編 集 公益財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団  
埋 藏 文 化 財 セ ン タ ー  
〒 791-8032 松山市南斎院町乙67番地6  
TEL (089) 923-6363

発 行 松 山 市 教 育 委 員 会  
〒 790-0003 松山市三番町六丁目6番地1  
TEL (089) 948-6605

印 刷 明 星 印 刷 工 業 株 式 会 社  
〒 790-0056 松山市土居田町500番地  
TEL (089) 971-7111

---

